福岡大学医学部同窓会

2005年秋号
烏帽子会会報 39号

九州国立博物館開館

平成17年10月16日、太宰府に（東京、奈良、京都に次ぐ４番目）

■ 平成16年度　評議員会報告　5
■ 平成17年度　研究奨励賞選考報告　7
■ 平成18年度　研究奨励賞募集要項　8
■ 準会員大募集　21
■ 平成17年度　在外研究援助金募集要項　36

目　次

・第24回烏帽子会総会報告 …… 白井和之 3
・平成16年度評議員会報告 …… 5
・平成17年度研究奨励賞選考報告
　研究奨励賞選考の経緯 …… 林　英之 7
　受賞者の言葉 …… 岩田　敦 7
・平成16年度研究奨励賞研究報告
　スタチンとHDLの動脈硬化巣形成に対する影響［計画］ …… 藤野正礼 8
・平成18年度研究奨励賞募集要項 …… 8
・教授退任挨拶
　「長い間有難うございました」 …… 八尾恒良 9
・教授就任挨拶
　教授就任のご挨拶 …… 立花克郎 10
　教授就任のご挨拶 …… 井上隆司 11
　教授就任のご挨拶 …… 内尾英一 12
　「烏帽子会」新任紹介 …… 桑原康雄 13
　就任のご挨拶 …… 小田島安平 14
・教授就任祝辞
　小田島安平教授就任のご祝辞 …… 大慈弥裕之 15
・教授就任挨拶
　教授就任ご挨拶 …… 松永洋一 16
・教授就任祝辞
　「たくましく、そしてしたたかに」 …… 松田年浩 17
・教授就任挨拶
　「戸を叩け、さらば開かれん」 …… 大慈弥裕之 18
・教授就任祝辞
　大慈弥教授ご就任のお祝辞 …… 内藤正俊 19
　大慈弥君の教授就任を祝う …… 飯田博幸 20
・準会員大募集 …… 21
・学生対策行事
　国試激励会 …… 井上隆則 22
　新入生歓迎会 …… 小川　厚 22
　M４激励会 …… 占部嘉男 23
・教室紹介
　精神医学教室 …… 藤内栄太 24
　心臓血管外科学教室 …… 岩橋英彦 25
・部長奮闘記
　開業17年　夢と患者さんに背中を押されて …… 高山邦子 26
・会員寄稿
　これが最後と心に決めて …… 井上隆則 27
　パリ漫遊記 …… 武末佳子 29
・クラブ生まれて30年
　クラブ生まれて30年（フェンシング部） …… 熊谷浩一郎 31
　ボート部生まれて30年を振り返って …… 魚返英寛 32
・教育職員人事 …… 33
・烏帽子会資料
　平成16年度収入支出決算　平成16年度残金処分　平成16年度特別会計決算 …… 34
　平成17年度収入支出予算 …… 35
　平成17年度事業計画 …… 36
・平成17年度在外研究援助金募集要項・在外研究援助金支給者報告 …… 36
・医局長医長名簿 …… 37
・図書紹介 …… 朝倉敏明・白日高歩 38
・事務局連絡 …… 39
・編集後記 …… 39

総会報告

第２４回烏帽子会総会報告

第24回　烏帽子会総会　実行委員代表　　白　井　和　之（８回生）

第24回烏帽子会総会は平成17年７月９日ホテル日航福岡で開催され、154名の方々にご参加いただき、盛大な会となりました。

今回の講演会は、福大卒業生としてはじめて東大の助教授になった８回生の黒岩宙司先生に、「国際保健の光と影：アフリカの小児医療とアジアのポリオ根絶活動を経験して」という演題で話していただきました。この講演に対してはいろいろな質疑が行われ、また多くの方からお褒めの言葉をいただき、同窓生の私どもとしても鼻が高い思いでありました。

懇親会では８回生の久保次郎先生の開会の辞、高木同窓会長の挨拶に始まり、特別会員の先生方、埼玉医科大学の小児科教授に就任された小田島先生（３回生）などからご挨拶をいただき、また福岡大学混声合唱愛好会プレミエールコールを招いて歌っていただきました。参加された方々は、久しぶりに会った同窓生や恩師と楽しいひと時を過ごすことができたものと思っております。

このような会を毎年維持して下さっている同窓会理事の先生方、今回ご協力をいただきました８回・18回卒業生、同窓会事務局の方々には大変感謝しております。この場をかりてお礼を申し上げたいと思います。

黒岩先生の講演

黒岩先生

●懇親会風景●

平成１６年度評議員会報告

専務理事、常任理事制の採用と準会員制の拡大を目指す

◆日時　平成１７年４月２４日　１６時
◆場所　福岡国際ホール
◆出席　評議員：実出席４２、委任出席２７、欠席２２
　　支部長：出席１２、欠席７

◇経過報告

高木会長から資料に基づき次のような経過報告があった。

１．今年の卒業生子弟の合格は７名であった。今年は合格ラインも上がり入学辞退も少なく、補欠の繰り上げ合格も例年は４０番位まであるところ今年は１８番までであった。

２．定年退職の教授は大島先生（眼科）、西丸先生（内科５）、都先生（歯科口腔外科）、八尾先生（筑紫消化器科）の４名。また３回生の小田島先生が埼玉医大の小児科教授に、５回生の松永先生が徳島文理大の薬学部教授に就任された。

３．昨日、Ｍ６の国試激励会を開き、学生から、今年の雪辱を期し力強い飛躍の決意が聞けた。

４．その他、諸行事の概要と第99回国試の成績等。

◇議題１．福岡大学医学部同窓会会則並びに細則の改正について

田野理事より、別紙資料によりおおむね次の提案理由の説明がなされた。

１．専務理事、常任理事制の採用・・細則第１条

最近の同窓会活動における質の高度化と量の増大により、それに対応する執行部の態勢の強化が求められている。理事会がそのような事態に適宜適切、且つ迅速に対処出来るようにするため、専務理事、常任理事制を採用したい。なおこれは現規定における理事会の任務を変えるものではない。

２．理事会の成立条件について・・細則第４条第３項

従来、当同窓会理事会は敢えて理事の過半数実出席をもって成立条件としてきたが、理事会招集度数の多さも原因してか、最近この条件がかなり厳しいものとなってきた。そこで世間一般の例に倣い、条件を緩和して委任出席を含む過半数出席をもって成立条件としたい。

３．準会員について

平成７年度に準会員制度が発足し、会費は当初入会費５万円のみであった。平成１１年、正会員を含む会費の大改正があり、準会員も入会費５万円の他に更に入会後１１年目から年会費１万円を納入する事となった。平成１７年度からその年会費の徴収が始まる。

準会員制度の目的は、出身大学の壁を越えて同じ職場で働く者の心を結び、協力し合い、相互を磨き、ともに大学の発展を目指そうというものであった。そのため将来は正会員と準会員の差別を無くし役職就任をも認めようと云う考え方さえ根底にあった。現在でも役職不就任以外の恩恵は全く正会員と同じである。しかし準会員の入会は現在に至るも延べ２０名、現員は１９名に止まり増加の傾向はない。

そこで考えられた事は、現在の準会員制の趣旨は正しい、しかしその趣旨を膨らませ発展させるためには、むしろ役職不就任の差別は差別として残し、一方会費の負担を軽くし入退会を自由にし、準会員の総数を増やすべきではないかという事であった。

・会則第１５条の次に退会に関する規定を設ける。・・本人が希望した時及び会費を３年以上滞納した時は退会させる。

・会費負担を軽減する。・・入会費を廃し入会年度から毎年度年会費を５千円とする。（従来は入会費５万円、１１年目から年会費１万円）
・既に現行規定により徴収した入会費は、新規定による初年度から１０年分の年会費と見なす。

以上の説明に対し質疑応答があり、

＊福岡大学医学部同窓会会則並びに細則の改正については可決された。

◇議題２．福岡大学創立７０周年、薬学部開設４５周年記念薬学部棟建設募金について

高木会長より提案理由の説明

薬学部棟建設に対する建設募金と言うことで、福岡大学と薬学部同窓会が共同で募金を行っている。福岡大学には九学部があり、その九学部の卒業生をまとめた同窓会組織である有信会も、それに協力する形で学内すべての学部同窓会に寄付を呼びかけている。薬学部は教育スタッフのほぼ５割が本学卒業生であるという特異な学部で、先輩が後輩を教育していると云える学部である。次の学長候補になっている占野先生や現学部長の藤原先生等人材も豊富である。本学でしっかりとした学部同窓会が出来ているのは理学部・工学部等など理系のほうに多い。商学部等はまだ出来ていないがそういう所にも声がかかっている。我々も福岡大学という総合大学の中の一学部として、当然協力をするということで募金活動に参加させて頂いた。金額は１００万円である。

薬学部は集金力はあるが、それでも１００万円という額は九学部の中では多い額のようである。薬学部の学部長や同じ福大卒の先生達からは非常に感謝された。医学部・薬学部・スポーツ科学部はこれから先の福大の学部として緊密に仲良くやって行きましょうということで、非常に良い雰囲気が出来たと思っている。

＊福岡大学創立７０周年、薬学部開設４５周年記念薬学部棟建設募金については拍手により満場一致で可決された。

◇議題３．平成１６年度収入支出決算見込み

池田事務局長資料により説明

収入見込　38,920,029円
支出見込　33,848,999円
収支差引　5,071,030

なお引き続き松本理事より**会費納入状況**につき説明があり、

＊平成１６年度収入支出決算見込みは拍手をもって承認された。

◇議題４．平成１７年度事業計画(案)について

二田理事より説明

・予算増加事業
在外研究援助金・・80万円→200万円
・予算減額事業
学生対策～30万円減（国試慰労会中止・参加者減少のため）
会員名簿、パニックマニュアル～今年度は非出版年
・その他は現状維持

さらに林副会長から在外研究援助金について説明が補足された。

その他、支部活動応援費、国試対策費について質疑があり、

＊平成１７年度事業計画（案）については拍手をもって承認される。

◇議題５．平成１７年度収入支出予算（案）

〈池田事務局長説明〉資料１１

＊平成17年度収入支出予算（案）は拍手をもって承認される。

◇議題６．決算評議員会省略の件

決算書類は総会前に各評議員、支部長に送付し、例年どおり総会前の決算評議員会は省略する。

＊決算評議員会省略の件は拍手を持って承認される。

（予算、決算、事業関係資料は３４ページ以降に記載）

研究奨励賞

平成17年度　研究奨励賞選考の経緯

選考委員長　林　英之（1回生）

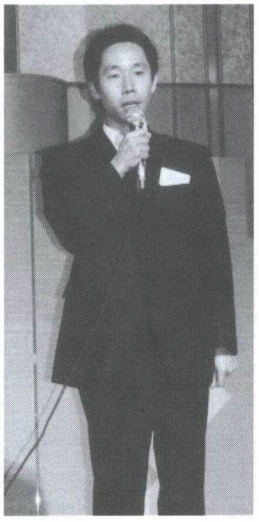
本年度も研究奨励賞選考委員会を6月に開催し、深夜に及ぶ選考の末、本年度は論文該当が無く計画で1件受賞の運びとなりました。例年は2件ないし3件受賞しておりますが、質を下げてはならないという選考委員の強い意志が反映されたものです。

受賞者は福岡大学循環器科勤務（20回生）の岩田敦先生の「HMG-CoA　還元酵素阻害薬（スタチン）による積極的脂質低下療法は急性心筋梗塞患者において、白血球表面抗原（接着分子）や炎症性ケモカインの発現を阻害し、冠動脈形成術後の再狭窄を抑制するか？」という計画に決定いたしました。実はこの計画は一昨年度にも提出されておりまして、“これは計画とはいえ少し時期尚早ではないか，更にがんばって詰めてくれることを期待しよう”ということで選に漏れていた課題です。今年は選考委員の気持ちが通じたのかより細かなデータを揃えられて、奨励賞に該当しうるまでに熟成され満票で選択されました再応募計画です。更にこれが立派な論文として提出されることが選考委員，会長の望みです。

最後に現在までの受賞者は、福大七隈，筑紫病院の方ばかりですが、同窓生で他の大学で研究されている方，或は準会員の方，そして同窓生で研究機関を離れているけれど、勤務医として，また個人開業の先生であっても、何かの研究をしたい，或は既にされているという方に、是非贈るべき性質のものであると思っています。ご参加の各支部の支部長には適当な方がおられましたら是非、ご推薦の労を賜りたいと願って選考の締めとさせて頂きます。

受賞の言葉

福岡大学病院　循環器科　助手　岩田　敦（20回生）



今回このような研究奨励賞を頂き、非常に光栄に思っています。

私は内科第二朔啓二郎教授のもと、主に動脈硬化に関する研究をさせて頂いています。具体的には、HMG-CoA還元酵素阻害剤（スタチン）による治療の白血球表面抗原や炎症性ケモカイン、冠動脈形成術後の急性心筋梗塞患者に対する影響を明らかにすることです。今年の春には研究が終了し、結果を検討したところ、白血球表面抗原や炎症性ケモカインに関しては明らかな効果は認められませんでしたが、強力に脂質低下療法を行うと冠動脈形成術後の再狭窄が有意に抑制されました。現在、論文を執筆し終え、医学雑誌に投稿中です。

このような研究ができたのも、ご指導頂いた朔教授をはじめとしたスタッフの先生方、実験を手伝って頂いたラボさんのおかげです。この紙面をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。今回頂いた研究奨励賞を励みに今後も研究と臨床の両面で頑張っていきたいと考えています。どうもありがとうございました。

研究奨励賞受賞者研究報告

スタチンとHDLの動脈硬化巣形成に対する影響［計画］

ミュンスター大学　藤　野　正　礼　（21回生・平成16年度受賞）

高脂血症治療薬として最も多く用いられているHMG-CoA還元酵素阻害剤（スタチン）は、様々な大規模臨床試験において主作用であるコレステロール低下作用に伴い、虚血性心疾患の抑制が証明されている。またスタチンはその血中脂質低下作用の他に近年細胞増殖、抗酸化作用などの多面的な効果が報告されている。以前われわれはシンバスタチンによる単球に対する細胞周期におけるＧ１－Ｓ期への進行の阻害を報告している。またスタチンはＨＤＬを増加させる作用があるが高濃度でのシンバスタチンでこの作用が顕著である。またFramingham Studyにおいて血中ＨＤＬが高値の場合虚血性心疾患が抑制されることや本来コレステロール逆転送系をつかさどるＨＤＬがスタチンと同様にそのほかの多面的な効果が報告されていることによりＨＤＬについても冠動脈疾患、またその原因のひとつである動脈硬化抑制作用に影響を及ぼすものと考えられている。今回は動脈硬化形成初期段階において重要な役割を示す単球や内皮細胞に対するスタチンやＨＤＬの脂質低下作用以外の多面的効果の検討を行った。

現在スタチンには水溶性と脂溶性の２種類がありシンバスタチンは脂溶性のスタチンである。シンバスタチンは単球の細胞増殖を抑え、カスパーゼ３の活性化によるアポトーシスの惹起、また血管新生の抑制も認められた。またHDLはシンバスタチンの作用を改善させていた。またシンバスタチンによる単球に対する細胞周期におけるＧ１－Ｓ期への進行の阻害、また細胞周期調節蛋白に対する影響も証明した。高濃度シンバスタチンの細胞増殖、細胞周期、アポトーシスに対する効果があるため単球や血管内皮細胞の増殖を抑制させていた。またＨＤＬはシンバスタチンによる作用を阻害させていた。スタチン、ＨＤＬ共に疫学的にも動脈硬化に伴う疾患に対しては効果的に働くといわれている。低濃度シンバスタチンではHDLと同様に血管新生を促進させるが、高濃度スタチンの血管新生に対する作用、ＨＤＬの単球に対する作用は動脈硬化に対しては促進的に働く。これらの作用はスタチン、ＨＤＬの多面的作用の１つとして動脈硬化促進作用に働くものもあると考えた。

平成１８年度　研究奨励賞　募集要項

対　　象：正会員及び準会員で、４０才未満の者または学部卒業後１０年未満の者
（本会会費完納を条件とする）
研究課題：医学に関するものであれば自由（医学に関する研究計画又は研究論文）
申請方法：所定の申請書による（所定欄に支部長推薦を要す）
提 出 先：〒814-0180　福岡市城南区七隈7-45-1　福岡大学医学部同窓会事務局
Tel 092-865-6353（直通）　代表 092-801-1011（内線3032）　Fax 092-865-9484
締　　切：平成１８年５月１日
賞状・賞金：奨励賞（優秀論文賞を含む）５件以内
発表及び表彰：平成１８年７月、第２５回同窓会総会席上
そ の 他：①受賞者は研究成果を総会で口演するか同窓会会報に発表する事
②申請書は同窓会事務局に請求又は烏帽子会ホームページからダウンロードの事
③申請書はワープロで記載し、過去の研究業績（原著、著書、症例報告、学会発表）、研究の独創性・重要性を十分に書く事

教授退任挨拶

「長い間 有難うございました」

名誉教授（前筑紫病院　消化器科教授）　八　尾　恒　良

私が福岡大学第一内科（主任 奥村 恂 教授）の助教授として赴任したのは26年前、44歳の時で、福岡大学を卒業した第１回生が研修を終えて研究室に配属された年でした。皆、若く、希望に満ち溢れ診療や研究以外にも野球やテニス、飲み会など今では信じられない様なエネルギーを費やしていました。コンパでの花瓶や“おひつ”での“お作り”の一気飲みは福大ならではの経験で驚きました。

それから20年余り、若かった卒業生の中から癌や成人病に罹患する人がみられるようになりましたが、教授や大病院の院長・部長、医師会の役員、第一線で活躍する花形医師など多士彩々の顔ぶれが育っています。名誉教授がみられないことを除けば、長い伝統をもつ他大学の卒業生の社会的活動状況と略変わらない構成になったと思います。

長い間に大学病院での診療体制も大きく変わりました。

患者が患者様になり、公立病院も大学病院も異口同音に病診連携を唱え、多数の急患の診療と渡り鳥よりも短期に移動する研修医の指導で疲れ果て、落ち着いてものを考える暇もないスタッフも少なくありません。そして最近では診療時間を割いた訳ではなく、睡眠時間を削って作った貴重な時間とエネルギーを費やした研究や論文も指導者としての業績にカウントされなくなるという話も聞いています。

私の在任中は同窓会の先生方のお陰で多数の症例を紹介頂きました。そして１時点で多数の患者さんを“さばいた”だけでなく、多数の症例の臨床経過や長期予後も教えて頂き、私共の診断や治療方法が正しかったかどうかを反省し、多数の論文にまとめることが出来ました。臨床は症例が一番の教師ですから多数の患者さんを診ることが基本ではありますが、大学ですからさらにエネルギーを使って新しいEvidenceを作り上げて次に進むという過程も必要と思います。そして、それが卒後教育の一環にもなりましょう。最近ではＥＢＭばやりですが、negative dataは論文として発表されないことが多いので、EBM一辺倒では駄目だと思います。特にメーカー主導の講演会や論文（アメリカの論文も含む）には問題が多く、老練な（？）同窓会の先生方と酒を飲みながらの体験談がはるかに臨床の糧となったことも少なくありません。

私は気性のいい若い医師の集団とそのエネルギー、さらに病理や外科、内科など筑紫病院の他科の諸先生、開業されている先生方など環境に恵まれ、幸せな大学生活を送ることができました。今後も私の時代以上によろしくお願いします。

立場は異なっても持場、持場を大切にして胸を張ってやっていくことが福岡大学医学部の発展につながるものと信じています。

長い間、有難うございました。

教授就任挨拶

教授就任のご挨拶

解剖学　教授　　立　花　克　郎（特別会員）

昭和62年（1987）３月
　久留米大学医学部卒業
昭和62年（1987）６月
　福岡大学付属病院研修医
　（第一内科）
平成元年（1989）６月
　若杉病院総合医学研究所
　（研究主任）
平成７年（1995）４月
　福岡大学医学部第一解剖教室助手
平成10年（1998）10月
　福岡大学医学部第一解剖学教室
　講師（併任）
平成14年（2002）４月
　福岡大学医学部解剖学教室講師
平成17年（2005）４月
　福岡大学医学部解剖学教室教授

私は昭和62年に久留米大学医学部を卒業し、研修医として福岡大学医学部第１内科に入局しました。平成６年に奥村恂前教授、浅野喬教授のご指導のもと学位を取得し、その翌年から解剖学教室（宮内亮輔教授のもと）で研究・教育に従事してきました。本年、４月１日付けで同教室の主任教授に就任いたしました。現在、研究面においては超音波エネルギーの生体への影響についての形態学的検討をしています。この研究を始めたきっかけは博士論文のテーマであった”超音波エネルギーによるインスリンの経皮吸収の検討”に始まります。この時、超音波を照射することによって皮膚の薬物透過性が飛躍的に促進されることを実験的に見いだしました。その後、解剖学教室の走査型電子顕微鏡・共焦点レーザー顕微鏡レベルで細胞を観察していたところ、超音波のエネルギーで細胞膜表面に多数のミクロの”穴”があくことを発見しました。しかも、この”穴”は20秒でまた閉じることも確認されました。この発見をもとに現在、超音波を利用した薬物・遺伝子の細胞内導入の技術は世界的に広がりました。幸運にも私がこの現象を実際に”見た”最初の学者となっています。現在はこの実験手技は”ソノポレーション法（Sonoporation）”と言われ、再生医療、遺伝子治療、発生学、クローニングなど様々な基礎研究分野で使われています。一方、同じ原理を臨床の場で使う試みも急速に進んでいます。血栓溶解剤と超音波エネルギーを併用することで、血栓溶解までの時間を大幅に短縮できます。急性期脳梗塞患者のRandomized trial でこの方法が有効であることが昨年、米国で発表され、大きな話題となりました。今まで学内では理学部、脳外科、産婦人科、内科、生化学、皮膚科、外科など、多数の講座と共同研究を進めて来ました。今後とも研究分野をさらに広げて行きたいと思います。医学教育面では２年生の解剖学教育を担当しています。解剖実習を通して医学知識だけでなく、優れた臨床医になるための精神教育にも力を入れていきたいと考えています。来年度の入学生からいよいよ１００％”ゆとり教育”を受けた学生を迎えますが、今以上に基礎医学教育に重点を置き、福岡大学の発展のために全力で頑張りたいと思います。

教授就任のご挨拶

生理学　教授　　井　上　隆　司（特別会員）

昭和56年（1981）３月
　大阪大学医学部医学科卒業
昭和56年（1981）７月
　九州大学医学部附属病院研修医
　（小児科）
昭和58年（1983）４月
　九州大学大学院医学系研究科
　博士課程
昭和62年（1987）６月
　ケルン大学生理学研究所研究員
　（フンボルト財団奨励研究員）
平成元年（1989）３月
　オックスフォード大学薬理学
　研究所研究員
平成３年（1991）３月
　九州大学医学部助手
　（臨床薬理学）
平成５年（1993）２月
　九州大学医学部講師（薬理学）
平成７年（1995）４月
　九州大学大学院医学研究院
　助教授（生体情報薬理学）
平成17年（2005）４月
　福岡大学医学部教授（生理学）

今春より今永一成教授の後任として生理学教室に赴任いたしました。私は、昭和56年に大阪大学医学部を卒業した後、九州大学医学部附属病院小児科に入局いたしました。小児科に在籍中は、福岡市立こども病院の感染症センター・NICU、福岡赤十字病院、九州大学付属病院の小児科・救急集中治療部などをローテートし、短い間ではありましたが、急性・慢性疾患の治療の最前線で貴重な臨床経験を積ませていただきました。その後、種々の循環器疾患を引き起こす分子機序に興味があったことから、当時、血管平滑筋基礎研究のメッカであった故栗山熙教授主催の旧九州大学医学部薬理学教室に大学院生として入れて頂き、単離細胞にパッチクランプ法を適用した新しい研究手法を用いて、当時未だ仮説の段階にあった「受容体作動性Ca流入機構」の解明を主要テーマとした研究を開始しました。この研究は、４年間のドイツ・イギリス留学を経て、現在、trp遺伝子スーパーファミリーの研究へと展開しております。trp遺伝子は、種々の物理化学刺激で活性化される、全く新しい電位非依存性Ca流入チャネルをコードしており、気管支喘息、高血圧、動脈硬化、腫瘍性疾患、筋ジストロフィー、アルツハイマー病等、種々の病態に関わっていることが明らかにされつつあります。このため、これまで有効な治療法がなかった疾患の薬物治療に新しい可能性を開く遺伝子群として、基礎研究者のみならず、臨床家や製薬企業の注目を集めています（今夏、全国の基礎・臨床の研究者に呼びかけて「TRPチャネル研究会」を発足させました）。今後は、TRP蛋白質の制御機構や生体内機能、疾患との関連の解明に留まらず、この蛋白質を標的とした新しい範疇のCa拮抗薬・活性化薬の開発にもチャレンジしていきたいと考えています。

生理学はいうまでもなく医学教育の基礎であります。医師を志す若者は、これを学ぶことを通して初めて本格的に医学に触れ、「生命現象」の神秘的とも言える真髄を知ることになります。また同時に、二つとない「いのち」の尊さについて考える機会も、「いのちの仕組み」の驚嘆すべき精妙さや多様性を実感することから与えられるのだと思います。今後は、このような神秘に満ちた生命現象を学ぶ喜びと生命に対する畏敬の念を、一人でも多くの若い人たちに伝え分かち合うことを目標として、皆様のご鞭撻をいただきながら日々地道な努力を続けていきたいと考えています。

教授就任のご挨拶

眼科学　教授　　内　尾　英　一（特別会員）

昭和60年　九州大学医学部卒業
昭和60年　横浜市立大学医学部病院臨床研修医
昭和62年　九州大学医学部眼科医員
昭和63年　小田原市立病院眼科医師
平成元年　横浜南共済病院眼科医師
平成３年　横浜市立大学医学部眼科助手
平成５年　日本学術振興会特定国派遣研究者（長期）ロンドン大学留学
平成７年　茅ヶ崎市立病院眼科医長
平成８年　横浜市立大学医学部眼科講師
平成12年　横浜市立大学医学部附属市民総合医療センター眼科助教授
平成17年　福岡大学医学部眼科教授

本年４月１日付けで，大島健司主任教授の後任として着任いたしました。私は昭和60年に九州大学医学部を卒業しましたが，その後，横浜市立大学眼科学教室で臨床，研究に従事して参りました。横浜市大は20年前のそのころ既にいわゆるスーパーローテートの臨床研修制度があり，２年間で４つの診療科を研修できるユニークな大学病院でした。現在の臨床研修制度を先取りしている面もあったと思います。来年度からは，新臨床研修制度を受けた医師が後期研修に入ってきますが，大学の教室へどのくらい入局者があるか，市中病院から母校に帰るかそのままとどまるのか，どこの教室も不確実で不安を少なからず抱えているのが現状です。大学病院として研修医に魅力的な臨床研修プログラムを作る上では各大学の自由度があってもよいのではないかというのが，過去におけるスーパーローテート経験者としての私見です。ところで横浜市大では眼炎症疾患の病態と治療に関する研究を専門として，免疫学および分子遺伝学的な方法を用いた，ぶどう膜炎，眼アレルギーおよび眼感染症など眼炎症疾患の発症や重症化のメカニズムなどを研究してきました。十数年前に英国ロンドン大学セントトーマス病院に留学して，熱ショック蛋白に関する免疫学的研究を行う機会がありましたが，誕生したばかりの長男を伴って，家族３人でロンドン郊外に住み，緑豊かな欧州の各地を訪ね歩いたのは忘れ難い思い出となっております。一方，臨床面では角膜移植が専門で，重症例には羊膜移植などを併用した治療を行って参りました。

私が生まれ育ったのは関東ですが，少年期から学生時代には長崎，山口に住んだ時期もあり，九州にはおよそ20年ぶりに戻ってきたことになります。福岡は気候や食べ物も関東とは異なりますが，とても生活しやすいところは変わっておらず，特に今年開通した市営地下鉄七隈線は道路の渋滞に影響されず，快適に毎日通勤することができ，大変助かっております。地下鉄は福大病院に来院する患者数の増加にも寄与しているのも，うなずけるところです。今後は福岡大学眼科において，眼科臨床とりわけ大学病院に要求される難治性疾患に対する外科的・内科的治療を充実させ，一人でも多くの優秀な眼科医の育成にも全力を尽くして参る所存です。烏帽子会会員の先生方にも末永く，よろしくお願い申し上げます。

「烏帽子会」新任紹介

放射線部第二　部長（放射線科・教授）　桑　原　康　雄（特別会員）

昭和５２年　３月
　九州大学医学部医学科卒業
昭和５２年　６月
　九州大学医学部附属病院
　放射線科研修医
昭和５３年　４月
　九州厚生年金病院臨床研修医
昭和５５年　４月
　佐賀県立病院好生館医師
昭和５６年　５月
　九州大学医学部附属病院助手
平成　６年　１月
　九州大学医学部附属病院講師
平成　７年　７月－９月
　文部省在外研究員
　（スウェーデン、ウプサラ大学
　　ＰＥＴセンター）
平成　９年　１月
　九州大学医学部附属病院
　放射線部助教授
平成１５年１０月
　九州大学病院放射線部助教授
　（名称変更）
平成１７年　４月　１日
　福岡大学病院放射線部第二
　教授

本年、４月１日付で福岡大学病院放射線部第二に赴任した桑原康雄です。この度は烏帽子会会員に加えて頂きありがとうございました。よろしくお願いいたします。

出身は大分県別府市です。九州大学や九州厚生年金病院、佐賀県立病院好生館等での研修、勤務を経て福岡大学病院に勤務することになりました。放射線部第二では核医学と放射線治療を行っていますが、私の専門は核医学です。核医学に関してはこれまでいろんな臓器について幅広くやってきましたが、脳核医学やPETがもっとも得意な分野です。また、甲状腺がんやバセドウ病に対する放射性ヨード治療も長年行ってきました。バセドウ病に対する放射性ヨード治療は欧米では標準的な治療ですが、日本ではまだ普及していません。数年前に法律が改正され、バセドウ病では外来でも放射性ヨード治療が可能になりましたので、今後普及が期待されます。福大病院でもバセドウ病に対する放射性ヨード治療を始めましたので、抗甲状腺剤の副作用等で困られている場合は是非ご紹介ください。PETに関しては、主にモヤモヤ病などの脳血管障害やアルツハイマー病やパーキンソン病などの脳変性疾患の脳循環代謝や神経伝達機能に関する研究を行ってきましたが、最近はPETが腫瘍の診断に有効なことが広く認められ、肺癌や悪性リンパ腫等の腫瘍の診療に利用されることが多くなりました。さらに、この秋から糖代謝診断薬であるFDG（半減期110分）が商業ベースで供給開始されることになり、PET検査は新しい局面を迎えています。九州では久留米に供給センターが始動しており、福大病院には１時間程度で到着可能です。装置の面ではPETとCTが一体化されたPET-CTが主流となっており、診断精度が飛躍的に向上しています。是非、早い時期にPET-CTを導入し、精度の高い核医学診療を提供したいと考えていますので、ご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

就任のご挨拶

埼玉医大学小児科学　教授　　小田島　安　平（３回生）

第24回総会（平成17年）で教授就任の
ご挨拶をされる小田島教授

平成17年５月１日付けで埼玉医科大学小児科学教授を拝命いたいしました。私は昭和55年福岡大学医学部を卒業後、国立病院医療センター（現、国立国際医療センター）で研修医、レジデントをしその後、国立小児病院（現、国立成育医療センター）アレルギー科でアレルギーを研修し、東松山市立市民病院小児科、千葉県こども病院呼吸器アレルギー科、都立広尾病院小児科をへて、平成11年より昭和大学小児科専任講師、その後助教授をしてきました。

私はこの経歴の中で、国立小児病院アレルギー科医長の飯倉洋治先生に師事し、その中で多くのよき同僚、先輩、後輩に恵まれ、今日に至っております。飯倉先生が昭和大学小児科主任教授に就任後、昭和大学にお世話になり、平成15年２月に飯倉洋治先生のご逝去後に先生の研究その他の報告書等を書き上げ、退職いたしました。

私は大学病院よりは一般病院や小児専門病院での経歴が長く、このため、基礎的研究よりは臨床研究をメインテーマとしてきました。小児の気管支喘息に対するテオフィリンの効果、薬物動態等、安全で効果的な使用という点が研究の主題でありました。このテーマは薬学、医学の両面からの研究であり、喘息患者をいかに臨床薬理学的にうまく治療するかということであります。このような治療学的研究をふまえ、よりよい治療ができる臨床医を育てていきたいと考えております。その他にも小児のアレルギー学全般特に食物アレルギー、アトピー性皮膚炎等のアレルギー疾患にわたっての研究を行ってきました。これらの研究より１人１人の患者から学ぶ姿勢を大事にする臨床を若いこれからの臨床医に伝えていきたいと考えております。

福岡大学同窓生の皆様には今回教授就任に当たって、多大なご援助をいただき大変感謝しております。また、福岡大学医学部長満留先生には推薦状をいただきました。大変感謝申し上げております。同窓生として今まで何もお役に立てずにおりますが、恩返ししたと考えております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

微力ではありますが、臨床、研究、教育に邁進し、地域医療に貢献する次世代の医師の育成に尽力してゆきたいと考えております。また、埼玉医科大学もなにとぞよろしくお願い申し上げます。

教授就任祝辞

小田島安平教授就任のご祝辞

福岡大学病院　形成外科　教授　　大慈弥　裕　之（３回生）

小田島安平先生、埼玉医科大学小児科教授へのご就任、おめでとうございます。奥様の優子様（旧姓、河野優子、三回生）にもお祝いの言葉を申し上げます。

私と小田島君、優子さんとの最初の出会いは昭和49年（1974年）４月の福岡大学入学式の日です。本学にある第一記念会堂での入学式典のあと、私たち百人あまりの新入生は烏帽子池の脇道を三々五々歩いて医学部に向かったのを憶えています。まだ互いにはっきりとは認識していませんでしたが、三人ともその場に存在していました。以来、卒業の昭和55年（1980年）３月まで、６年間ともに過ごしました。

九州の開業医の子女が多い同級生の中、東京からはるばる博多までやってきた小田島君は、当初、特異な存在として同級生の目に映っていたように思います。言葉や態度がわれわれ九州人とはまるで違うのです。彼は見知らぬ人とも最初からフレンドリーに接し、正統な標準語で喋ります。彼には全く責任は無いのですが、このような振る舞いは田舎の人間には、ビジネスライクで表面的な態度であるように映ることもあり、最初のうちは距離を置くものもいました。

私が小田島君と真に親しくなったのは、大学３年生以降です。父が池袋で開業することになり実家が東京に移りました。休暇で実家に帰省している間、東京で小田島君と会う機会が増えました。彼は目白の自宅から池袋まで自転車に乗って遊びに来てくれ、私も山手線に乗って目白まで訪ねてゆくようになりました。彼と話す機会が増えるにつれ、思いやりの深い、暖かい人間であることに次第に気づくようになりました。また、当時から彼は誇りを大切にして、しっかりとした将来像を持ち、それに向けてコツコツ準備をするという計画性も持っていました。私はずいぶん驚かされ、触発されたことを記憶しています。

福大卒業後、小田島君は国立小児病院（現国立成育医療センター）の小児科へ、私は防衛医大の皮膚科へ入局しました。二人とも関東の病院勤務となったため、医師になってからも度々会うことができました。彼はその後、千葉県こども病院、昭和大学病院小児科で専門領域のキャリアを積み、現在の専門であるアレルギー疾患（気管支喘息、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎）の分野で顕著な業績を挙げるまでになりました。

母校を離れ、仲間一人いない環境の中で実力を養い、上司や患者さんの期待に応え、さらに専門医として頭角を現すに至るには、並々ならぬ努力とご苦労があったものと思います。私自身も同様の経験があるだけに、その苦労の過程は手に取るように分かります。小田島君の今回の快挙に対して、心より慶賀し、同級生とともに大いに快哉を叫びたいと思います。

教授就任挨拶

教授就任ご挨拶

徳島文理大學薬学部、医療薬学講座　教授　　松　永　洋　一（５回生）

昭和５７年３月
　福岡大学医学部卒業
昭和５７年ー５９年
　徳島大学医学部　第３内科入局
　（研修医、医員）
昭和５９年ー６２年
　高松赤十字病院　内科
昭和６２年ー平成２年
　高知医科大學第１内科（医員）
平成２年ー８年
　徳島大学医学部第３内科（助手）
平成８年ー１１年
　UCSF, Biochemistry & Biophysics
　（postdoctoral fellowship）
平成11年ー１５年
　福岡大学医学部第５内科
　（助手、講師）
平成１５年４月より
　徳島文理大学薬学部
　医療薬学講座（教授）

平成１７年４月より、徳島文理大学薬学部、医療薬学科講座の教授に就任致しました松永です。昭和５７年　福岡大学医学部（５回生）卒業後、諸先生方からの暖かい御支援を頂き現在に至っていることに深謝致します。福大医学部卒業後、いろいろな医局、研究所でお世話になりました。徳島大学第３内科（呼吸器）に入局し臨床研修をスタートしましたが、当時の主任教授がアミロイドーシスの厚生省研究班長を務めていたこともあり、私の研究はアミロイドで始まりました。その後、数年間高松赤十字病院内科へ出向後、高知医科大学第１内科（消化器）にて肝臓内リンパ球動態（肝臓常在性リンパ球）の研究、徳島大学第３内科に帰局し遅発性アレルギーを研究テーマとした好酸球の生化学、とりわけ好酸球由来、新規蛋白分解酵素（セリンプロテアーゼ）の精製およびその生理的意義（ケミカルメディエータ脱顆粒現象）について研究を進めて参りました。また、この過程でマクロファージの外来抗原提示能に関与するプロテアーゼ（カテプシンB）の研究を徳島大学酵素科学研究センターと共同で進めて参りました。その後、縁あってカリフォルニア大学サンフランシスコ校、生理生化学講座教授であるプルシナー博士の許で４年間プリオン病（いわゆる狂牛病）の研究に携わりました。あれは、１９９７年１０月のことでした。プルシナー博士のノーベル医学生理学賞授賞が突然発表され、私も含め教室のポスドク（３５名）、テクニシャン（２０名）、スタッフ（８名）の全教室員が大興奮したのが昨日のように思い出されます。これらの研究経緯より、帰国後は脳神経変性疾患、とりわけ蛋白化学分野での研究が続行できる方向で探していたところ、母校である福岡大学第５内科の山田教授がその方面の御研究をされていると聞き帰国後約６年間、本年３月まで福大第５内科でアルツハイマー病の基礎研究を継続してきました。御承知のようにアルツハイマー病の主病因は、ベータアミロイドであり、今振り返ってみれば、いろいろな経緯がありましたが結局２３年前、徳大第３内科でスタートした最初の研究テーマであるアミロイドに戻っています。何か因縁めいたものを感じます。臨床と基礎研究の両立は容易ではありませんが、これまで臨床教室に在籍しながら、基礎研究を継続できたのは、巡り合った諸先生方の寛大な心によるところが大きいと感謝致しております。年齢的にもそろそろ独立する時期に差し掛かった感もあり、本年４月より現職に就任致しました

が今後とも皆様方の温かい御支援を賜りたいと思っております。皆様もご存知の如く、全国の大学薬学部は、現在６年生教育に向けて、コアカリキュラム作成を含め教育内容改変の激動期にあります。甚だ微力ではありますが、今後も臨床に則した基礎医学、薬学の発展に寄与してゆく所存でありますので宜しくお願い致します。

教授就任祝辞

「たくましく、そしてしたたかに」
松永洋一君の教授就任を祝う

松田脳神経外科クリニック　院長　　松　田　年　浩（５回生）

松永君が徳島文理大学薬学部の教授に就任されました。おめでとうございます。いったいどんな分野の何の研究が認められたのでしょうか？正直知りません。しかし私が友人代表として祝辞コーナーにご指名を賜るのは当然の成り行きですので、いくつか思い出を書かせていただきます。

思い起こせば大学入学から６年間、縁あって学籍番号の並んだ私達は何十回何百回、席を前後して試験を受け続けたかわかりません。試験のたびにどの様な会話を交わしたのか、一つも思い出せないくらい時間も経ってしまいましたが・・。彼は東京理科大を経て福大医学部に入学した経緯を持ち、民族学上、純理科系族に分類される特性を有しておりました。そのため教養課程の数学や物理は彼にとっては屁の様なものであり、私の如きえせ理科系族はずいぶんとその能力の恩恵に与ったものです。入学後、彼は徒党を組むことを嫌い、常にマイペースを貫きました。クラブ活動やコンパで騒ぐ凡庸な青春を良しとせず、ある時はフランス語の習得に熱中し、ある時は傾いた場末の赤提灯で、くたびれたばあちゃんの人生相談をちびちびやりながら聞いてやっておりました。それが彼の幸せなのでした。

彼が我々と最も違っているのは、個の時間を非常に大切にし、普通の医者に比べて一人で考える力が何倍も強いということです。そしてその体質こそが卒後の研究活動にも大きな影響を与え、有利に働いたのでしょう。彼は常に健全な批判的精神を持ち、それは時にはシニカルにも映るのですが、私が彼と今だに酒を飲んでいるのは、そのありきたりではない感性に惹かれているからに相違ありません。死ぬまでそのままでいて欲しいものです。

彼の口から今回の教授選の可能性を聞いたのは１年半以上前になり、今思えばすでにかなりの自信があったことになります。数年間に及ぶサンフランシスコ留学を終えて帰国すると、何を思ったか神経内科教室へ鞍替え入局。どんな研究をやっているのかと思っていると、じっくりと練り上げた人生の戦略的設計図を正確に組み立てて竣工。その実行力は本学の卒業生には稀有なたくましさであり、学ぶべきしたたかさだと感心させられます。

ともあれ木村恒二郎君（現広島大学法医学教授）以来５回生から誕生した久々の教授様です。「５回生は出来が悪い」と言われながらも、実はまだまだ大学で頑張っている同期が何人もおり、さらに期待が膨らみます。松永洋一教授の誕生を弾みに今後も吉報が届くことを祈っています。

教授就任挨拶

「戸を叩け、さらば開かれん」

福岡大学病院　形成外科　教授　大慈弥（おおじみ）　裕　之（３回生）

S55年３月　福岡大学医学部卒業
５月　防衛医科大学皮膚科入局
S56年５月　北里大学形成外科入局
S63年５月　福岡大学医学部大学院入学
H２年４月　福岡大学整形外科入局（併任講師）
H５年10月　福岡大学整形外科（講師）
H９年10月　福岡大学病院形成外科（助教授）
H10年11月　ボストン小児病院、Brigham & Women's Hospital留学
H13年４月　福岡市立こども病院形成外科併任（非常勤医師）

開業医の息子である私は博多で育ち、西南学院中学校、筑紫丘高等学校を経て、1974年に福岡大学医学部に入学しました。小学生のころより絵を描くことが好きで、中学、高校と美術部に所属していました。高校時代は授業をさぼってまで部室でデッサンや油絵を描く真面目な（？）生徒でした。その頃は将来、芸術関係の仕事につくのだろうと漠然と考えていました。しかし、気がつくと新設の医学部に入っていました。福大入学後は、若い教授陣の情熱のおかげで、次第に興味が生理学や解剖学など医学の方に移ってゆきました。

大学５年生の夏休み、あるきっかけにより東京警察病院で形成外科を見学する機会がありました。医学部の講義では癌や感染症を診断し治療するという基本的な臨床医学を習っていましたが、それらの治療後に生じた身体の欠損や変形を専門的に治療する分野があることを初めて知りました。この見学で私の目指す道が決まりました。

1980年、卒業と同時に形成外科専門医を目指すべく上京し、防衛医大を経て北里大学形成外科に入りました。当時、北里大学病院では欧米の卒後臨床研修システムであるレジデント制による教育がなされていました。そこで厳しいながらも効率的で密度の高い卒後研修を受けることができました。また、全国から集まってくる優秀な同僚達とのきびしい競争にも負けない“たくましさ”も、身に付けることができました。専門医も取得できました。

1988年、博多に帰り福岡大学医学部大学院に進学しました。薬理学の古川達雄教授の下で交感神経節の伝達機構に関する研究をするかたわら、皮膚科や整形外科に顔を出して手術の手伝いをしていました。このことが整形外科の初代教授である高岸直人先生の知るところとなり、1990年、整形外科に併任講師として採用していただくことになりました。整形外科で手の外科のチーフをしていた同級生の飯田博幸氏とともに形成外科診療班を立ち上げ、福岡大学病院における形成外科診療を始めました。

翌年、高岸教授は定年退職され、九州大学より緒方公介先生が次期主任教授として就任されました。幸いなことに緒方先生はアメリカでの卒後臨床教育の中で実際に形成外科の研修を受けられた経験もあることから、私たちにも理解を示して下さり、形成外科診療班は引き続き強力な支援を得ることができました。

1996年、菊池昌弘病院長のご尽力を得て形成外科は診療科に昇格しました。外来、病棟、医局がそれぞれ独立し、耳鼻科や外科、救命センターなど他科との共同手術も増え、医局員も次第に増加して

きました。整形外科では1998年末、緒方先生が急逝されるという悲しい出来事もありました。

現病院長の白日高歩先生、整形外科主任教授の内藤正俊先生からも暖かいご支援を賜わることができ、形成外科は毎年着実に発展しています。2005年現在、医局員の数は20名を越え、年間の手術件数も700件以上になりました。

振り返ってみると、実に多くの方々の愛情に支えられてこそ、ここまで歩んでくることができたことが、あらためて分かります。恩師、上司、同僚、紹介医の先生、患者さん、家族、などなど。その中には福岡大学医学部同窓の仲間も数多くいます。とくに形成外科開設当初の立場的にも気持ちの面でも不安な時期に、学内外よりくり返し励まし勇気づけてくれた１期生、２期生の先輩および３期生の同級生の方々の存在は、私の大きな支えとなっていました。皆様にこの場を借りて深く感謝を申し上げます。

美術に興味のあった私にとって、形成外科という形を対象とした医学の分野で仕事を続けることができるのは、幸せなことだと思います。ミッションスクールであった中学時代、朝の礼拝の時間に賛美歌を歌い聖書を読んでいました。聖書の一節に、「戸を叩け、さらば開かれん。なぜなら求める者は与えられ、尋ねる者は見出し、戸を叩く者には開かれるから」というものがありました。社会に出ると、最初から扉を開いて私たちを待っていてくれるようなことはありません。私もいろいろな場所で戸を叩き、開けてもらうことにより今の仕事にたどり着くことができました。勇気を振り絞って戸を叩いたことも、または苦渋の思いで叩いたこともありました。後輩のみなさん、逃げることなく勇気と希望を持って目の前の扉を叩いて下さい。自分の知らない新しい世界が待っています。

教授就任祝辞

大慈弥教授ご就任のお祝辞

整形外科学　教授　　内　藤　正　俊（特別会員）

福岡大学病院形成外科診療部長大慈弥裕之助教授が平成１７年１０月１日付けで福岡大学病院教授に昇格なさいましたのでお祝い申し上げます。福岡大学病院形成外科の母体は整形外科でしたので、ご挨拶させて頂きます。

大慈弥先生は昭和５５年に福岡大学医学部を卒業後、防衛医科大学校付属病院、北里大学病院、近畿大学医学部付属病院で幅広く外科系の卒後研修を受けられました。昭和５８年から形成外科をご専門にお選びになり、北里大学医学部、神奈川県立こども医療センターなどで勤務なさいました。平成２年に福岡大学病院にお戻りになり、私どもの福岡大学病院整形外科に形成外科診療班を創設して頂きました。爾来、形成外科診療班の患者数は増加の一途を辿り、平成８年１０月に整形外科から独立した新しい診療科として形成外科が設立されました。

大慈弥先生の専門領域は外傷、新鮮熱傷、先天異常、乳房に代表される悪性腫瘍切除後の再建術、瘢痕拘縮、美容外科など幅広く、治療成績も優れています。そのため患者数が年々増加の一途を辿り、２００４年度の形成外科関連手術件数は７５４件となっています。形成外科単独だけでも６０５件あり、中央手術室利用診療科中、整形外科（９４４件）、眼科（９１２件）、第２外科（８９９件）、産婦人科（７３１件）

に次ぎ、五番目に多い手術件数になっています。設立当時の手術件数は年間２００件前後でしたので、２００４年度は設立当時と比較して３倍以上と飛躍的に増加しています。

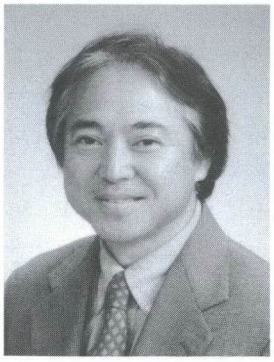
大慈弥先生は臨床の諸問題を解決するための基礎的研究や学会活動を精力的に行っていらっしゃいます。平成５年３月に星状交感神経節におけるアセチルコリンの分泌に関する研究で福岡大学医学博士号を取得し、平成１１年度には米国のBostonの病院で海外研修をなさいました。欧文での学会発表や論文作成に困らず、国際的にも活躍なさっています。遊離皮弁の血行に関する研究、手術方法や器具の開発などで目覚ましい成果を次々と海外へ発信し続けていらっしゃいます。国内的には既に幾つかの学会の会長もお勤めになっています。

大慈弥先生は卒前、卒後教育にも熱心です。ＢＳＬの学生に外科系の基本となる縫合の基礎から皮膚移植や先天異常まで解り易く指導なさっています。臨床医としてのバランスを習得しながら高度な専門性を修得させる卒後研修システムも構築なさっています。診療科開設以来、９年間で医局員総数は２３名に達しており、本学出身者が１６名、他大学出身者７名となっています。現在までに医局員の１１名が形成外科学会専門医を取得なさっています。

形成外科は診療、研究、教育の全ての面で大学病院だけでなく医学部にも貢献しており、さらに今後発展することが予想されます。大慈弥先生の福岡大学病院教授への昇格をお祝いするとともに、医学部に一日も早く形成外科学講座を設置して頂くよう願っています。

大慈弥君の教授就任を祝う

飯田整形外科クリニック院長　飯　田　博　幸（３回生）



同級生の一人として、また形成外科を立ち上げた彼の苦労をみてきた者として病院教授就任をお祝い申し上げます。

大慈弥君は卒業後福岡大学病院に残らず、形成外科医になることを目指して主に北里大学形成外科で研鑽を積んでいます。生え抜きではないために実力を正当に評価してもらえなかったようなつらい日々もあった様に聞いていますが、他の大学のシステムを経験したことは彼にとってとても大きな財産となった様です。母校を離れなければ、母校の良さも悪さも冷静に判断することはできません。

卒業後は会う機会もなかったのですが、偶然形成外科学会で顔を合わせ、彼が福大に戻り大学院で研究するつもりであることを知りました。しばらくして大学の構内で出会い、いろいろと話をする機会がありました。彼は大学院在籍中も臨床を積極的に行う場がほしいと考えていましたし、私は私で彼の形成外科の臨床の経験、特にmicrosurgeryの技術を教わりたいと思っていました。

当時私は高岸教授の下で整形外科の手の外科のスタッフとして働いておりましたので、教授に大慈弥君を紹介し彼が整形外科の中で外来診療や手術することを許可してもらえないかと相談しました。「一人ではやりたい治療もできないだろう。我々にとっても有益だ。カンファランスにもでるように」二つ返事で許可が下り、こうして彼の二足の草鞋を履く生活が始まったのです。

形成外科や手の外科の治療にはmicrosurgery

は欠かせない手技ですが、当時の私達は指の再接着をたまにするぐらいのものでした。彼が整形外科の手術に参加するようになって、free flap（血管吻合を行う皮膚、筋、骨、複合組織移植）が治療の選択肢として加わったのでした。勉強会や手術を通して創傷の処置や皮膚の取り扱いの基礎を正しく、厳しく指導してくれたことは研修医のみでなく私個人にとってもよい経験となりましたし、多くのことを彼から学びました。小児の下肢へのfree flapの術後、夜通しで経過を見たのも今はいい思い出です。

１年以上たったある日、高岸教授に呼ばれ、大学院をやめて臨床に専念する事を大慈弥君に説得するよう命じられました。彼の臨床の能力を高く評価してのことですが、それまでの大学院での研究が無駄になります。スタッフとして受け入れてもらうことを条件に入局してはどうかと勧めたところ、驚いたことに彼はこのチャンスを逃しませんでした。福大に形成外科を立ち上げようという野望がすでにあったのでしょう。さらに尊敬すべきは、それからの忙しい臨床の傍ら大学院で行っていた研究を続けて後に学位論文を書き上げたことです。

６年間の整形外科での診療後、1996年形成外科として独立し現在に至るわけですが、その間整形外科の故緒方教授、現在の内藤教授の大きな後ろ盾がありました。また病理学教室で仕事をしながら形成外科医として陰となって大慈弥君をささえたご夫人の努力にも敬意を表します。

形成外科が行う治療は他科とoverlapすることが多く、他科との連携が重要ですが、当初はどちらの科が治療をするかといった軋轢も少なからずありました。こういった問題も彼の真面目な姿勢と真摯な態度がいつの間にか解決に導いたようです。今や押すに押されぬ１診療科として福大医学部を支えており、すでにchairmanとしての実績は充分に認められています。彼が教授として他の大学病院に引き抜かれなかったことは形成外科だけでなく福岡大学病院にとって幸運だったと思います。今後は形成外科の発展と正教授への路を目指して更に頑張ってください。学生、研修医の諸君、形成外科の技術を身につけたい外科系の若い先生方、どうぞ形成外科の門をたたいて彼の指導を受けてください。

準会員大募集

準会員に入会しやすくなりました

準会員制度の目的・・出身大学の壁を越えて同じ職場で働く者の心を結び、協力して相互を磨き、共に大学の発展を目指す

◆入会費が無くなりました。
◆年会費が正会員の半額になりました。
◆それでいて受けることの出来る恩恵は正会員と同じです。
（研究奨励賞、在外研究援助金、慶弔贈与、会報、名簿、パニックマニュアル）

関係者の方には既にご案内を差し上げました。

学生対策行事

国試激励会

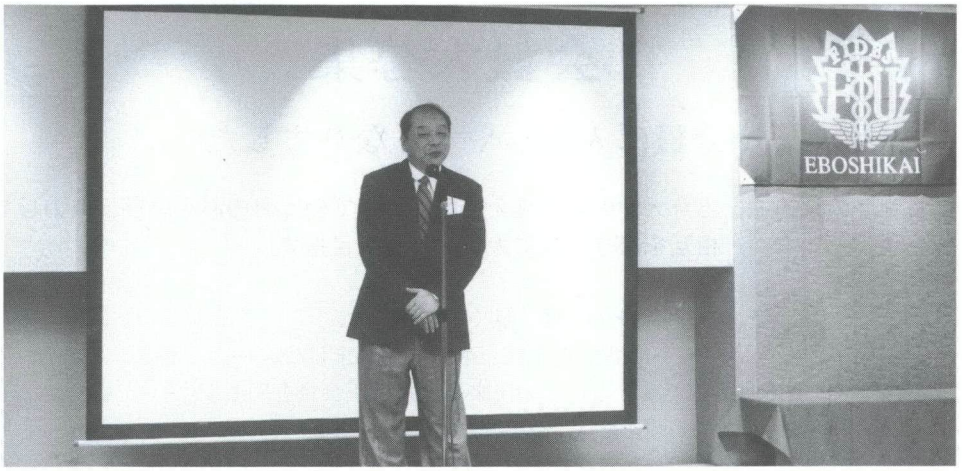
評議員　井　上　隆　則（7回生）

今年も、恒例の福新楼にて、M6の激励会が開かれました。ちょうど本番まで一年を切り、いよいよチーム勉強に本格的に突入する頃のことです。学生、OB合わせて約100人もの参加で最初は昨年度の反省から始まりましたが、最後は学生からの「昨年は悪かったかもしれませんが、それはジャンプする為には一回しゃがまないといけないんです。伸びる為のバネなんです。だから、今度は頑張ります。」という強くたくましい意見で締めくくられました。この勢いが本物であり、来年度のいい結果に繋がることを期待しています。

激励の言葉を述べるＯＢたち

新入生歓迎会

理事　小　川　　厚（6回生）



歓迎の辞を述べる権藤福岡支部長

烏帽子会恒例の新入生歓迎会が平成17年５月20日（金）に福新楼にて行われました。ここ数年は福岡大学創立記念日の前日に開催することになり、翌日はゆっくり休めるためか（？）多

数の新入生たちが参加してくれました。高木会長の熱い熱い御挨拶に続き、今回は朔啓二郎教授の福岡大学の将来像などのスライドプレゼンテーションを含む歓迎の御挨拶をいただいて会は始められました。その後、学内外を問わず参加してくださったOB諸氏から皆仲良くしっかり勉学に励めとのお言葉をいただき、学生たちも熱心に聞き入っておりました。宴もたけなわとなった頃には、あちこちで部活単位の車座もみられ、OBの自慢話など本当に楽しそうでした。会のエンディングでは毎年恒例となった烏帽子会エンブレムTシャツに袖を通し、一同が肩を組み一つの輪になって校歌を（３番まで）斉唱いたしました。閉会後、新入生たちは独自で二次会を企画していたとのこと、入学して１ヶ月少しだというのに結束力の強さに感心いたしました。若い力が今後の福岡大学医学部の未来を背負って参ります。同窓会会員の皆様、どうか温かく見守ってやってください。

最後に、ご多忙中にもかかわらず参加していただきました諸先生方に心より御礼申し上げます。

M4激励会

理事　占　部　嘉　男（5回生）

恒例のＭ４激励会が９月15日に福新楼で行われました。当日は台風14号による休講の補講が遅くまであり、学生さんの参加が60名とやや寂しい会となりましたが、クラス担任のＯＢ大慈弥（形成）、東原（放射線）、藤内（精神）に多数参加していただき、師弟の親睦を深める上でも有意義なものでありました。今年は国家試験の成績が悪かったために、ＯＢの激励の言葉も、いつになく厳しかったようです。

最近の学生さんを見て気付いたのですが、服装や振る舞いが非常に礼儀正しくなったような気がします。この会が始まった当初に比べ雲泥の差があります。先の衆議院選挙で、インターネットで論文を提出するだけで大量に当選した小泉チルドレンといわれる若者議員がインタビューで自分の両親のことを「お父さん、お母さん」と言っているのを見て、うちの学生の方がよっぽどしっかりしている（中には例外もありますが）と思ったのは私だけでしょうか。

礼儀作法は医学部の講義で教わるものではありません。この会は学生に説教して礼儀作法を身につけさせるものでは決してありませんが、卒業するまでに３回このような会に出席し、ＯＢ、ＯＧと語り、触れ合ううちに医師としての自覚やモラルが養われていくのではないでしょうか。

福岡近郊におられるＯＢ、ＯＧの方にはお誘いの電話をすることがあるかもしれませんが、その時は是非参加して学生の相談相手になってやってください。

同窓会から贈られるＢＳＬ用白衣の説明をする高木会長

教室紹介

「若い医局」 精神医学教室

精神医学教室　医局長　　藤　内　栄　太（20回生）

当教室は、現在２代目の西村良二教授が主宰され、今年の10月で６年目を迎えます。当教室の最も大きな特徴は、教授から医員までの医局員の平均年齢が32.6歳という若い医局ということです。このような当教室を診療・研究・教育から紹介してみます。

精神神経科の診療は大きく３つの部門に分かれておこなわれています。１つ目は外来部門です。現在、精神神経科外来では10名の医師が診察を行っています。疾患は、統合失調症、気分障害、不安障害が主体ですが、最近では小児うつ病、認知症、もしくは性同一性障害も増加しています。また、身体科から数多くリエゾン依頼があります。

２つ目は病棟部門です。開放病棟に42床、閉鎖病棟に18床、併せて60床あります。病棟の建物は、昭和59年に作られた西別館の１階にあるため比較的新しい病棟といえます。近年、入院治療の質の向上を図ってきました。結果として入院期間の短縮化が進み、新規入院患者数はここ数年、年間で150人以上を維持しています。12名の医師が病棟担当となっています。

３つ目はデイケア部門ですが、1974年に、国内初の大学病院デイケアとして開設されました。現在、登録者数はおよそ70名で、一日平均の通所者数は約20名前後です。他の精神科デイケアに比べ通所者の平均年齢が若いというのが特徴としてあげられます。統合失調症を中心とした患者様がスタッフとともにSSTやスポーツ、社会復帰のためのセミナーや、お弁当作りなどの職業訓練も行い、積極的な治療活動を行っています。

研究グループは、現在８つほどありますが、それぞれの医局員が１つのグループにだけ参加するわけではなく、いくつかのグループにまたがって参加しています。精神療法、認知症、臨床精神薬理学、思春期、統合失調症、性同一性障害、睡眠、うつ病のグループがあり、心理・

社会的な分野での論文が主ですが、臨床精神薬理グループでは、薬学部との共同研究がすすんでいるために今後は生物学的な分野での論文も増えそうです。

今年より、前期臨床研修必修化制度により当科にもすべての研修医がローテーションするようになりました。当教室ではすべての研修医に対して16時間以上のクルズスを行い、一人につき３人の上級医または指導医を割り当てるという手厚い研修制度を採っています。また、医学部５年生の実習についてもこれまでどおりの実習内容を維持しているため、医員にかかる負担は大きくなりましたが、学生や研修医にとっては比較的若い先生が多いためなじみやすいようです。

教室の雰囲気は、比較的若い先生が多いために自由で活発な雰囲気で、休み時間には笑い声が絶えません。経験不足なところは否めませんが、教室を引っ張る若手の先生は、負担を感じながらも新たな取り組みをしていくことにやりがいを感じており、全員が一つにまとまってがんばっています。

心臓血管外科学教室

心臓血管外科学　医局長　　岩　橋　英　彦（17回生）

福岡大学心臓血管外科は、昭和50年に初代教授の浅尾　学先生によって創設されました。開設当初は病院診療科であって、医学部の講座でなく、２内科のＣＣＵと大部屋の一部屋を借りて手術を始めたというエピソードがあります。医学部も講座となったのは、昭和53年からです。それから徐々に手術症例数を伸ばし、平成５年に２代目教授として木村道生先生が、３代目教授の田代　忠先生が平成16年９月から就任され、現在に至っています。この10年間の手術症例数の伸びは目覚ましいものがあり、ここ３年間の総手術症例数は、心臓手術、大血管手術、末梢血管手術あわせて250件を超えております。特に田代教授の専門である冠動脈バイパス術は、年間症例数をコンスタントに100例以上こなしており、その約７割がオフ　ポンプ（人工心肺非使用冠動脈バイパス術）で行われるなど精力的に手術を行っております。また、臨床だけでなく、研究、教育にも力を注いでおり、造影剤を用いない術中冠動脈造影法の研究開発、術後心房細動抑制の研究、プロトロンビンの定量の研究など手術だけでなく、多岐にわたり研究活動も行っています。教室員は、教授１人、講師２人、助手４人、医員２人と総勢９人の小さな医局ですが、定例手術、緊急手術、研究、教育と24時間体制の少数精鋭でがんばっています。特に若い先生方には充実した研修が経験できると思います、若い先生方の参加をお待ちしています。また、同窓の先生方からの患者様のご紹介に対しては全力を挙げて対応したいと思います、今後ともよろしくお願い申し上げます。

部長奮闘記

開業17年　夢と患者さんに背中を押されて

邦生会　高山病院　部長　高　山　邦　子（4回生）

昭和56年福大内科第二（荒川内科）に入局し、県立宮崎病院、浜の町病院などをローテートした後、同じように一旦社会に出た後医師を志した夫と、ないないづくしの中で、昭和63年に筑紫野市に腎・泌尿器科専門病院（入院50床、透析42床）を開業しました。

開業当時は周囲に競合する病院もなく、多忙で毎日当直をしていました。現在では、ESWL（体外衝撃波による腎・尿管結石破砕術）の症例も多く、また、血液透析も、保存期からシャント手術、導入、外来維持透析と一貫して治療を行っております。病院開業によって自分の理想とする医療に少しでも近づく事が可能となりましたが、その一方、初診時の高血圧における胸写、心電図や入院保存期慢性腎不全での月2回の胸写がレセプトで過剰診療と判断される等、頭の悩まされることも多々あります。またバブル景気時には、看護師さんをはじめとする人手不足に悩まされ、その際は入院患者さんを減らし対応したほどでした。そういった熱に浮かされたような時代がようやく終わり、腰を落ち着けて医療ができると喜んでいたのもつかの間、気が付けば冬の時代の到来です。国の財政赤字を背景に医療費は安いほど良いという風潮となっています。日本は今でも世界に比して低コストで高レベルの医療を提供できている国と思っていたのに信じられない気がしますが、そういった状況でも何とか乗り切らねばなりません。

そこで、当院が提供する医療サービスをさらに充実させ、まず患者さんに喜んでいただく事が一番だという、開業を志した原点に立ち帰り、今は前立腺癌に対するハイフ療法の導入（高エネルギー焦点式超音波療法、入院期間3泊4日で切らずにすむ治療法）、日帰りでのESWL施行、慢性腎不全保存期の教育入院の実施（食事療法の習得）、地域公民館での講話、ホームページでの健康相談等に力を注いでいます。

最近、私は腰椎椎間板ヘルニアで4月より2ヶ月以上休むという、医者になって初めての長期休暇をとりました。外来診療に復帰をした際、「ご迷惑をおかけしました。」と言う私に、患者さんが口々に「先生、大丈夫ですか。私たちのためにも、無理をしないで下さいね。いらっしゃらないと困ります。」と言ってくださったのです。開業17年で聞いた一番嬉しい言葉でした。そしてこの言葉に背中を押されて、私ももう少しこの道を歩いていこうと心を新たにしました。30年前、医学部に入学して目指したこの道は、人と心を通い合わせることのできる素晴らしいものであったと改めて思う今日この頃です。（MM750062の独り言）

会員寄稿

これが最後と心に決めて
（2005．6．3　日本対バーレーン戦）

のぞみメンタルクリニック　院長　井　上　隆　則（7回生）

それは平成１７年５月のある日の朝でした。

その頃、サッカー日本代表は、三大会連続のWカップ出場をかけてアジア最終予選が続いていまして、今年は、イラン、バーレーン、北朝鮮とのホームアンドアウェイ全六試合の結果、上位二位に入れば出場。三位はプレーオフに回るという方法でした。

ライバルはイラン。それにしても、このWカップ予選というのは世界中で様々な真剣勝負が行われ、その戦いの厳しさはWカップ本大会よりも激しいものと言われます。世界ランキングでは格下となる相手国チームとの対戦でも決して楽に勝てる試合はありません。今回の予選も簡単にはいかないことは容易に想像できる事でした。そういう中で、開幕戦をテレビで観戦して、ぎりぎりの勝利。そして、次のアウェイでのイラン戦に負けてしまった時、これで試合のスケジュールからも実力からも、バーレーンとの二試合が「大ヤマ」になることも容易に想像できる事でした。

しかし、私にとって今回はテレビで落ち着いて観戦と考えていたのです。にもかかわらず、周囲の皆さんから「応援に行ってたんでしょ。」「テレビに映っていなかった？」とか「次は行くんでしょ。」とか私の心を刺激される方が多いこと。そのたびに、「今回は行きません。」ときっぱり宣言を続けていたのです。

そうこうして４／３０のホームでのバーレーン戦にかろうじて勝利。次は、随分間が空いて６／３のアウェイでした。５月になってテレビや新聞では、次の試合がWカップ出場をかけた大一番になることが目立ち始めていました。

そういう中で、確か５／１８の朝、いつものように食事して、いつものように新聞を開いて、スポーツ欄を見て、６／３決戦の記事。今でもよく分からないのですが、その時になぜか、**突然**「やはり自分が応援に行かなければ。。。」と**急遽**「その気になった自分」をはっきりと感じたのです。試合まで二週間。早く準備と手配をしなければ間に合わないという状況。どうやって行けるのか？どういう所なのか？費用はどれ位？仕事は？と立て続けに調べて、「もうこれで日本代表の応援は足を洗う。」「ドイツにも行かないから。」という妙な説得したり、来年もしも開業でもしたらもう行けないからと妙に納得したり。

そして何とか、かんとか、言いながらも、まずは先立つものとして、パスポートを探しましたがこれがなかなか見つかりません。確か２００２年に韓国に行ったときが最後なので、Wカップ関係の荷物の中にきっとあるはずと考えながら、でも、もし出てこなかったら諦めようと。すると、パスポートが見つからなくて、なんと現金１０万円が見つかりました。自分でも覚えがなくて、何故こんなところに？しかも、その直後にパスポート発見。「ふむふむ、これはきっと１０万円を使ってバーレーンに行けという神様の命令たい。」と勝手に解釈して。そして行くと決まったら、ばたばたと準備に。新しいＴシャツ購入、新しいゲートフラッグ作成、携帯をＦＯＭＡに買い替え（国際通話可能のため）て、いざ６／２出発。

朝、福岡から台北、香港、ドバイを経由して約１７時間かかって、バーレーンに到着。時差は六時間マイナス。現地では夜の１０時過ぎでしたが気温は３１度。日中は４４度にもなります。翌日、決戦の日は金曜日。バーレーンという国では、この金曜日が日本の日曜日と同じで、お休みの日。試合はその日の夜７時からという休日のゴールデンタイムということになり

ます。当日は夕方から試合会場へ。当然ながら、色々な持込規制があると説明がありました。

ところが。日本人専用駐車場から歩いて、入場門へ。そこをチケットを見せて通ると、次は手荷物検査。でも、女性はノーチェックでＯＫとかで、そのまま通り抜けていました。でも、自分の荷物も、触られることもなくＯＫサイン。１９９７年ソウルでの予選の時のように金属探知機が設置されているに違いないと覚悟していたのに、拍子抜け。それからチケットの半券をもぎられて、ようやくスタンドへ。

日本人専用スタンドで約２０００人の座席があり、五時半頃だったけれども、すでに８割の日本人でスタンドは埋まっていました。ふと見渡すと、持ち込み禁止のはずのペットボトルがあちこちに。結局表向きの規制であって、実際は極めていい加減なものだった様子ですね。

ここからは、ツァー同行者とも離れて、単独行動となり、ウルトラスの中心に近い場所に１人で入り込んで、準備。予想通りそのまま試合終了までその場から動くことはなく、もちろん座席に座ることもなく、立ったまま、応援を続けました。

夜だったけども、気温は３０度以上、蒸し暑くて汗だく。お隣には、成田からの０泊２日弾丸ツァーの女性。彼女達も試合に勝ったのは良かったけれども、風呂にも入れずにそのまま飛行機へと向かいました。バーレーンの人達はかなり親切で、ちっとも怖くないし、友好的。試合後も笑顔で手を振ってくれたり、声をかけてきたり。

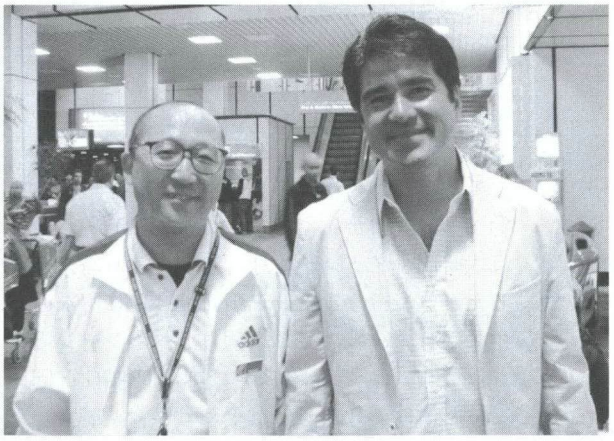
無事にバスに戻って、ホテルへ。あちこちで乾杯の声が上がっていました。

確か、地球儀で確認したけれど、バーレーンという国は、とても小さな島国でした。そして、イスラムの国の中で唯一、アルコールの規制がなくて、砂漠の中のオアシスのようなところでした。恐らく、もう二度と訪れることはないでしょうが、私の記憶に消えることのない足跡が残りました。

帰り着いたら、早速「テレビに映っていた。」との複数の方々からの証言？話を聞きつつ、すぐに６／８の北朝鮮戦を迎え、見事にドイツ行きを決めたのです。

周囲からは、「ドイツ行くんでしょ。」って決めセリフのように必ず声をかけられますが、「いいえ、行きません。」「今度の予選が最後と決めていましたから。」と返事しています。

ドイツ用に貯めていた、５００円玉貯金もバーレーン行きで使ってしまいましたしね。いえ、いえ、本当に行くつもりはなかったんです。って、誰も信じてくれない？みたいなんですが、本当にあの日の朝の新聞記事を読んだあとに、神様のお告げが舞い降りたかのような？？気持ちになったんです。え！、、どうせまた来年もそういう適当な言い訳で、ドイツに行くんだろうって？ですか。なぜか、行かない決意表明するなんて妙な投稿になりました（笑）



元日本代表永島氏と筆者

筆　者

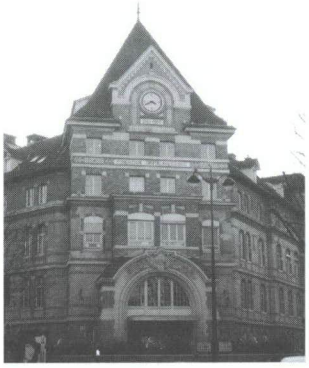
パリ漫遊記

筑紫病院　眼科　助手　武　末　佳　子（11回生）

９月下旬にしては暑すぎる29度の京都から３日後，辿り着いたパリは日中19度。街はすっかり晩秋の装い。なんという落差でしょう！そうして，私の３ヶ月間だけのパリジェンヌ生活は始まりました。

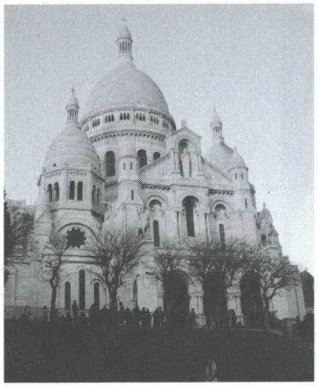
昨年９月から12月までパリで生活する機会を得たのです。この貴重な経験について皆様にご報告させていただくことにしました。

１．研修先（ちゃんとお勉強？してきました）



（写真１）

Fondation Adolf Rothschild（写真１）の眼科，Thanh Hoang-Xuang教授の元で，３ヶ月間の臨床見学をしました。パリ17区 Buttes Chaumond公園の南側（サクレクール寺院 -写真２- で有名なモンマルトルの丘の東側という方が分かりやすい？）に位置し，前世紀の初めに建った趣のある外観の病院です。現在はパリ第７大学の附属病院として，また，パリでは三大眼科病院の一つとして地域の救急診療にも重責を負っていました。このRothschild病院は，眼科と皮膚科を主体とした病院ですが，眼科の中でも眼表面（眼瞼，結膜，角膜など）がHoang-Xuang教授（写真３）の専門でした。従来、後眼部（網膜や硝子体）疾患にどっぷり浸かっていた私は，以前からの夢であった前眼部眼科を学ぶ機会を得て，その研修の場の一つとしてここパリに来たわけです。



（写真２）

（写真３）中央筆者

訪れる患者は、フランス人はもちろんながら、ベトナム、北アフリカ、中東アラブ方面からも多く、まだまだ耳慣れないフランス語だ～、と必死で聞いていたら、実は聞いているドクターも理解できなかった、なんてこともありました。手術は白内障が最も多数でしたが、角膜移植や眼表面疾患に対する手術治療も行い、そのために必要な組織（角膜や羊膜）は、パリ市内のセンター的施設に申し込めば、予定日に供給されるという組織運営方法は羨ましい限りでした。アイバンクという名はあるものの、その実際は単発的な独占組織である日本の実情とは大違いです。10年以上前には組織売買が問題になっていた経験を乗り越えての成果なのかもしれません。

開放型病床体制も、充分に稼動していました。また、時間外になるとキッパリと救急外来医が担当する（たとえかかりつけ患者でも）という割り切りも日本とは大きく違う点でしょうか。

眼科Resident達は、アメリカの様なマッチング方式で研修先が決まり、３－６か月ごとに病院間をローテーションしていました。その中に「ユーロ枠」があり、東欧等から参加していました。フランス人resident達は、不公平だ、と不満を漏らしていましたが、アメリカで言う

Minority枠みたいなものでしょう。

レーザーによる角膜屈折矯正手術も積極的に行っていましたが（写真４）、いわゆる保険点数が削減されたところで、内装の立派な開業医に患者が流れて困る、と嘆いていました。

（写真４）

秋から冬にかけてのパリ。アパルトマンを出て８時前に病院に着いても外はまっ暗。夕方５時頃病院を出るときにはもう日没後、という実に暗い、真面目な３か月でした。

と、思います？折角パリにいるのに！

２．観光編（パリ市内）

頃はクリスマス。キリスト教の国フランスでは，最も重要なお祭りシーズンです。パリも例外でなく、11月初旬から始まる街中のイルミネーションは非常に見応えがありました（写真５はホンの一部ですが）。日本と違うのは、BGMはなく、飾りは賑やかだけれど静かだったこと。Concorde広場では、一か月間だけ観覧車が出現（写真６）。でも吹きっさらしで高速回転、一乗車で５－６回転はしました。ちょっと寒くて怖かった。

水・金曜日は、22時前まで開館しているルーブル美術館。人の少ない美術館をのんびりと低価格で見られたのは、やはりそこに住んでいるからこその特権でしょう。ちょうど、ルイ15世の王冠やドラクロワの天井画などで知られるギャルリー・ダポロンもrenewal openでした。

３．美味しかったパリ　生活編

自炊でしたが、なんといっても食材が美味しくて安い。通勤路には、2004年のコンクールで一位になったバゲット（いわゆるフランスパン）を売っているBechuという店があり、毎日お世話になりました。今でも夢に見ます。それにワインにチーズ、それだけでも充分ですが、さらに、秋冬の味覚セップ茸・ポルチーニ茸、贅沢なところでは白・黒トリュフ。ゴックン。

毎日２－３個ずつ「メゾン・ド・ショコラ」のチョコレートを買って帰る、なんていうのもプチ・贅沢。

４．そして周囲の都市・国々へ

週末・連休を利用して、ハンガリー、ウィーンへ友人を訪ねて、ロンドンへはユーロスター乗車とミュージカル観劇へ。ワイン祭のボーヌ（ブルゴーニュ地方）では、ロマネコンティの畑を訪ねて。ストラスブールは両親とクリスマス・マーケット見物へ、などなど。

というわけで、実は、とっても忙しい３か月でした。

京都－パリ－大阪と渡り歩いた研修年を終え、再び筑紫病院で多忙な日々を過ごしています。この一年が実現できたのも筑紫病院眼科部長向野先生をはじめ、研修先を紹介して頂いた諸先生がた、その方達との縁を結んでいただいた大島前教授、そして、大阪で３か月間仕事と生活の場を与えて頂いた原吉幸先生（２回生）のお陰に他なりません。誌上をお借りして深く感謝申しあげます。

（写真５）

（写真６）

クラブ生まれて30年

クラブ生まれて30年（フェンシング部）

循環器科　講師　熊　谷　浩一郎　（７回生）

1975年、３回生の渋谷・梅野両氏が２年生時にフェンシング部を創部されて以来、30年が経つ。高校生までにフェンシングをやったことがある人はまずいないと思うが、ちゃんとしたオリンピック種目である。両氏ともフェンシングをやったことはなかったが、以前からやってみたいという興味はあったらしい。また、ありきたりのスポーツではなく、あまり人がやっていないことをやろうというパイオニア精神でフェンシングをやろうということになったようだ。もちろん二人では愛好会として認可されない。もちろんフェンシング経験者などいるはずもなく、同級生にゴースト会員になってもらって愛好会として認可された。

初めは、やり方もわからないため、福岡フェンシング協会の講習に参加して、手ほどきを受けたらしい。ただ、他の医学部でフェンシングをやっているところがないため、残念ながら今でも九山・西医体には参加することはない。そのため、福大本学か西南大学、あるいはオリンピック選考会としての県大会の試合にでるしかないため、勝てるはずはなかった。

その後、５回生の小谷野氏が入部し、会員３人となったが、このままでは廃部となる可能性が強かった時に、1978年我々７回生の３人（稲津、小川、熊谷）が入部し、６人となった。そのお陰で廃部を免れた。クラブ勧誘会の時に、当時５年生であった永田由美（旧姓；井上）さんという美女に「あなたに感じが似ている友達がいるから待っていてね」といわれて紹介されたのが梅野氏だった。ヤンキーぽいところに共感を覚え、二次会の中洲に連れて行ってもらった。私は、男・梅野氏に惚れ、永田さんに一目惚れし、フェンシングはしたくなかったが、永田さんがマネージャーならと入部した。しかし、後で分かったことだが、永田さんは実はマネージャーではなく、ゴースト会員だった。私と小川君はすでにゴルフ部に入部していたが、私が小川君を誘って一緒に転部した。先輩３人と新入部員３人であったため、マンツーマンで指導してもらえた。その後、後輩がぞくぞく入部してきて、一時10人に達するまでになった。そのひとり、久原君は私の幼馴染であったので勧誘したが、彼はその天性を発揮してみるみる上達し、県大会で３位に入賞した。これは創部以来、初の快挙であった。その後も、磯部君も入賞した。この二人はフェンシング部史上、歴史に残る名選手だった。そのうち渋谷・梅野両氏も卒業され、我々の時代には、小川君がキャプテンとしてさらに部活動を盛り上げた。

夏休みに、阿蘇で合宿を開始した。体育館を借りて、午前中は汗ビッショリになって練習に励んだ。午後は、ドライブしたり麻雀をしたり、夜は宴会と、楽しい思い出になった。フェンシング部のいいところは、上下関係が封建的ではないところで、先輩ー後輩が兄弟のように仲良く和気藹々とできるところであった。合宿は、その後も、益崎君や岩田君達が続けた。

その後、卒業生が増え、OB会が発足した。最初の顧問は元第一外科の志村教授であったが、退官後池田教授に引き継がれた。しかし、池田教授はテニスをしたいということでテニス部の顧問となられ、私が大学教職員であるという理由で交代を命ぜられた。

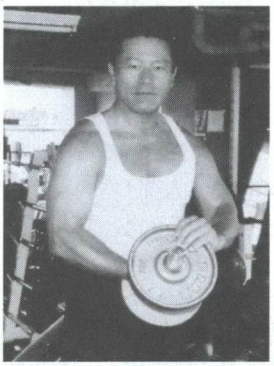
OBとの対抗試合は志村教授を記念して、志村杯と名付けられた。志村教授は、歓迎会や忘

年会のみならず、志村杯にも出席していただいた。

現在は、城本、出口、松原君たちが活動を続けている。大型新人の辻本君は、高校時代からフェンシングをやってきており長崎県大会で入賞の経歴の持ち主で、今後の活躍が大いに期待される。

ボート部生まれて３０年を振り返って

魚返外科胃腸科医院　院長　魚　返　英　寛（５回生）



私が入学した時、この総合大学である福岡大学にないスポーツクラブを作りたいと考えました。アメリカのアイビーリーグではボート部は有名でした。この伝統のある大学にはなかったのです。しかしながら、艇は勿論、漕ぐ場所、艇庫、道具などなにもなく立ち上げるには少し苦労しました。先ずボート愛好会設立届けを本学の学生課に行きましたところ、担当者より“君たちはあの病院の前のどぶ池で漕ぐのか？”と一笑されました。

色々な人脈を経て最初は九大の本学のボート部といっしょに練習を一から教えてもらうことでスタートしました。九大の御好意により廃艇寸前のナックル艇をもらい、塗装補修しながら毎週末多々良川の河口で練習に励みました。部員も２クルーに増え自分たちの新しい艇が欲しくなりましたが、先ずは新しいオールを買うために、七隈祭でジャズ喫茶をして売上金でマイオールを買いました。次の夏休みには部員全員で大丸デパートの中元梱包アルバイトで、ついに念願の新艇を買うに至った訳です。九山、西医体と毎年出場しましたが、福大医クルーの特徴はスタート半ばまではだんとつ、後半スタミナ切れで最下位というパターンが続いたのでした。

初代顧問には第一内科の奥村教授を迎え、コンパのたびに琵琶湖就航の歌を合唱したものでした。途中で不幸な事故もあり、この部はしりつぼみに消滅かと思われましたが、二代目顧問池原教授のもと、後輩諸君の地道な努力で現在に至っているようです。

ボート競技は他のスポーツ競技のような華やかさはさほどありません。スタートとゴールに観衆はいますが途中の最もつらいところは応援が届かない場合が多く、また全くの個人プレーはなく、極端に言えばクルーの鼓動の一つまで一致しなければならぬ程の緻密なチームプレーの極致といってもよいスポーツなのです。国際級になるとボート選手はバスケット選手の身長に、プロレスラーのパワー、マラソン選手の持久力が要求される程過酷といわれています。ゴールした時ローアウトといって失神する者もでる程です。しかし、その“漕ぐ”という一見単純で、超アナログ的中に鍛え上げられた身体と強いチームワークをもったメンタリティ、競技の駆け引きなど、すればする程奥が深いスポーツといえます。

しかしながら、今のＩＴ、デジタル化時代に色々なスポーツ科学が発達し、トレーニング方法や栄養管理が進んでいます。即ち、医学部学生だからこそ出来る医科学的根拠に基づいたトレーニング、栄養管理で強いチームをつくり上げて戴きたい。今後共に、福大医学部の伝統あるスポーツクラブとして活躍して欲しいものです。

私自身も５０歳を過ぎた今でもボート部時代に行ったウエイトトレーニングは続けております。何よりも、この学生時代に培った体力、気力が心の余裕となり、今の診療活動に役立っていることは、言うまでもありません。

平成１７年度役職員・病院長選挙結果

（就任は理事会の承認を経て平成１７年１２月１日）

医学部長	岩崎　宏	（病理学教授）
医学研究科長	黒木政秀	（生化学教授）
福岡大学病院長	瓦林達比古	（産科婦人科学教授）
〃　副病院長	斉藤喬雄	（内科学第四教授）
〃　〃	朔　啓二郎	（内科学第二教授）
筑紫病院長	田中　彰	（筑紫脳神経外科教授）
〃　副病院長	浦田秀則	（筑紫内科学第一教授）
教務委員	出石宗仁	（教育計画部教授）
学生部委員	竹下盛重	（病理学教授）

教育職員人事（併任講師以上）

（○内の数字は福大医学部卒業回）

［平成17.4.2～17.10.1］

区分	所属	資格	氏名	発令日
退職	脳神経外科	助教授	山本正昭 ⑦	17. 4. 30
	皮膚科	講師	古村南夫	17. 4. 30
	病理	助教授	大島孝一	17. 5. 31
	微生物・免疫学	助教授	赤羽啓栄	17. 8. 9
	眼科	講師	大里正彦 ⑨	17. 9. 30
昇格	歯科口腔外科学	教授	喜久田利弘	17. 10. 1
	形成外科	教授	大慈弥裕之 ③	17. 10. 1
	呼吸器科	教授	渡辺憲太朗	17. 10. 1
	筑紫消化器科	教授	松井敏幸	17. 10. 1
	整形外科学	助教授	柴田陽三 ④	17. 10. 1
	循環器科	講師	西川宏明 ⑱	17. 10. 1
採用	脳神経外科学	講師	大城真也 ⑪	17. 10. 1

〔訃報〕微生物・免疫学助教授　赤羽啓栄先生が平成１７年８月９日ご逝去されました。

福岡大学医学部同窓会資料

平成１６年度収入支出決算

区分	科目	16年度予算	16年度決算	収支差引	摘要
収入	繰越金	4,000,000	6,280,770	▲2,280,770	
	会費収入	22,101,000	25,668,970	▲3,567,970	入会費92件:4,554,240 学年会費516件:5,125,570 年会費1,610件:15,989,160
	協賛金収入	2,000,000	1,820,000	180,000	会員名簿広告掲載料
	手数料収入	700,000	1,091,535	▲391,535	
	雑収入	430,000	497,871	▲67,871	グッズ売上代ほか
	預り金収入	216,000	164,232	51,768	給与源泉徴収税
	積立金繰入	3,000,000	4,000,000	▲1,000,000	烏帽子会会員名簿第８号発行経費として
	仮受金	0	1,500,000	▲1,500,000	運転資金として同窓会勘定より代理店勘定に仮受
	合計	32,447,000	41,023,378	▲8,576,378	
支出	給与	4,420,000	4,071,247	348,753	職員1人、パート２人
	旅費	1,890,000	1,659,370	230,630	役員旅費:1,236,060 その他:423,310
	事務用品費	360,000	320,742	39,258	
	印刷費	6,298,000	5,967,690	330,310	会報:1,629,766 会員名簿:3,534,174 その他:303,750
	通信運搬費	2,415,000	2,346,283	68,717	電信電話料:114,063 郵便代:2,021,850 メール便代:86,900 その他:23,470
	設備工事費	310,000	247,275	62,725	ホームページ維持契約:210,000 プリンター保守契約:37,275
	什器備品費	200,000	221,624	▲21,624	パソコン１台ほか
	事業費	10,790,000	10,605,922	184,078	支部対策：1,176,000 研究奨励：2,901,470 学生対策:3,523,362 グッズ作製費：1,003,275 寄付金：1,700,000その他：301,815
	会議費	1,500,000	1,122,950	377,050	理事会･会長懇話会:488,570 評議員会:467,270 奨励賞選考委員会（２ヶ年度分）:110,210 その他:56,900
	公租公課	70,000	81,600	▲11,600	法人県市民税:70,000 収入印紙:11,600
	雑費	2,632,000	3,346,372	▲714,372	渉外費:2,179,589 慶弔費:193,810 税理士報酬:31,500 業務用グッズ代:258,380 その他:683,093
	預り金支出	216,000	181,885	34,115	
	引当金積立	0	1,000,000	▲1,000,000	刊行物積立金積立
	仮渡金	0	1,500,000	▲1,500,000	運転資金として同窓会勘定より代理店勘定に仮渡
	予備費	1,346,000	0	1,346,000	
	合計	32,447,000	32,672,960	▲225,960	
	収支差引	0	8,350,418	▲8,350,418	

平成１６年度残金処分

残金額（収支差引額）	8,350,418円
◆次年度繰越	8,350,418円

平成１６年度特別会計決算

	事業積立金	医学教育研究基金	刊行物積立金	合計
前年度より繰越	93,806,477	3,063,148	6,008,967	102,878,592
本年度増加額	1,000,000	0	3,000,000	4,000,000
本年度受取利息	4,481	169	1,466	6,116
本年度減少額	0	0	4,000,000	4,000,000
本年度未決算	94,810,958	3,063,317	5,010,433	102,884,708

平成１７年度収入支出予算

区分	科目	16予算	17予算	17 摘要	17予算－16予算
収入	繰越金	4,000,000	5,000,000		1,000,000
	会費収入	22,101,000	23,445,000	入会費:4,738,000 学年会費:4,468,000 年会費:14,239,000	1,344,000
	協賛金収入	2,000,000	0		▲2,000,000
	手数料収入	700,000	1,180,000	集金手数料ほか	480,000
	雑収入	430,000	430,000	グッズ売上ほか	0
	預り金収入	216,000	108,000	給与源泉徴収税	▲108,000
	積立金繰入	3,000,000	0		▲3,000,000
	仮受金	0	0		0
	合計	32,447,000	30,163,000		▲2,284,000
支出	給与	4,420,000	4,040,000	職員１名、パート２名	▲380,000
	旅費	1,890,000	1,970,000	役員旅費:1,470,000 通勤旅費:200,000 その他:300,000	80,000
	事務用品費	360,000	360,000		0
	印刷費	6,298,000	2,040,000	会報:1,720,000 その他:320,000	▲4,258,000
	通信運搬費	2,415,000	1,460,000	電信電話:120,000 会報:840,000 切手葉書代ほか:500,000	▲955,000
	設備工事費	310,000	310,000	維持契約:210,000 その他:100,000	0
	什器備品費	200,000	200,000		0
	事業費	9,790,000	11,300,000	総会準備費:200,000 支部対策:2,000,000 研究奨励:3,500,000 学生対策：5,000,000 グッズ作製費600,000	1,510,000
	会議費	1,500,000	1,500,000		0
	公租公課	70,000	70,000	法人県市民税:70,000	0
	雑費	3,632,000	2,432,000	慶弔費:400,000 渉外費:1,500,000 その他:532,000	▲1,200,000
	預り金支出	216,000	108,000	給与源泉徴収税	▲108,000
	引当金積立	0	2,000,000		2,000,000
	仮渡金	0	0		0
	予備費	1,346,000	2,373,000		1,027,000
	合計	32,447,000	30,163,000		▲2,284,000
	収支差引	0	0		0

平成１７年度事業計画

項　目	摘　要	必要経費（A）	平成16年度（B）	比　較（A－B）
会報の発行	印刷代：春200×4,000部=800,000 秋200×4,600部=920,000 封筒代：　10×9,000枚= 90,000 郵送料：　120×7,000通=840,000	2,650,000	2,643,000	7,000
総会の開催	総会準備会費	200,000	200,000	0
支部活動援助	講師招聘援助費：50,000×10支部=500,000 支部活動費：2,000×500人分=1,000,000	1,500,000	1,500,000	0
研究奨励賞	５件以内	1,500,000	1,500,000	0
在外研究援助金	１件20万円以内	2,000,000	800,000	1,200,000
学生対策	新入生歓迎会：800,000（Tシャツ含む） Ｍ４激励会：700,000 国試激励会：700,000	2,200,000	2,500,000	▲300,000
白衣贈与	BSL用長衣、短衣：10,000×100人=1,000,000	1,000,000	990,000	10,000
国試対策費	国試対策費：200,000　副担任会議：250,000 国試応援費：200,000	650,000	650,000	0
支部祝儀贈与	支部発足：50,000× 2=100,000 支部会参加：30,000×10=300,000	400,000	400,000	0
学生行事援助	西医体、全医体、医学祭援助：400,000 学生行事への参加：100,000	500,000	500,000	0
慶弔贈与	祝儀、弔慰金、見舞金：20,000×5=100,000	100,000	100,000	0
グッズ作製	グッズ作製（ネクタイ、ネクタイピン）	600,000	1,500,000	▲900,000
会員名簿の発行	（今年度は実施せず）	0	5,115,000	▲5,115,000
パニックマニュアルの発行	（今年度は実施せず）	0	0	0
奨学金緊急貸与	緊急時における奨学金の貸与	1,000,000	1,000,000	0
合　計		14,300,000	19,398,00	▲5,098,000

平成１７年度　在外研究援助金　募集要項

対　　象：正会員、準会員及び学生会員（本会会費完納を条件とする）で医学の研究または医療技術の習得のため、３ヶ月以上外国に留学する者

申請方法：所定の申請書により、留学出発３ヶ月前までに提出の事

提 出 先：〒814-0180　福岡市城南区七隈7-45-1　福岡大学医学部同窓会事務局
Tel 092-865-6353（直通）　代表 092-801-1011（内線3032）　Fax 092-865-9484

援 助 金：１件２０万円を限度とし、年間１０件以内

発　　表：その都度、同窓会会報に掲載

そ の 他：①受給者は帰国後その成果を総会で口演するか同窓会会報に発表する事
②申請書は同窓会事務局に請求又は烏帽子会ホームページからダウンロードの事

受給者名簿（平成16年11月以降）

藤野正礼（21回生）福岡大学医学部内科学第二研究生　ドイツ　ミュンスター大学
野田尚孝（17回生）福岡徳洲会病院　外科　デンマーク　コペンハーゲン王立病院

医局長・医長名簿

（○内の数字は卒業回、筑紫病院の＊印は内科・消化器科の代表）

平成17年10月現在

所属	医局長	病棟医長	外来医長
［福大病院］			
血液・糖尿病科	安西慶三	鈴木恵子	一瀬一郎
循環器科	三浦伸一郎 ⑪	安田智生 ⑰	西川宏明 ⑱
消化器科	入江真 ⑬	西村宏達 ⑰	早田哲郎 ⑪
腎臓内科	小河原悟 ⑦	武田誠司 ⑪	笹冨佳江 ⑬
呼吸器科	久良木隆繁	白石素公 ⑪	山本文夫
神経内科・健康管理科	齊藤信博 ⑲	井上展聡 ㉑（6北）	小林智則（神経）
〃		宗清正紀（7階）	上原吉就 ⑯（健管）
精神神経科	藤内栄太 ⑳	吉田公輔	浦島創
〃（ディケア）			塚田泉 ㉓
小児科	柳井文男	安元佐和 ⑦	山口覚 ⑤
外科第一	松尾勝一 ⑪	藤木健弘 ⑭	緒方賢司 ⑮
外科第二	白石武史	前川隆文 ②	星野誠一郎
整形外科	城島宏 ⑭	金澤和貴	吉村一朗 ⑰
形成外科	木下浩二	白武靖久 ⑳	田中哲一郎 ㉑
脳神経外科	阪元政三郎 ⑧	大城真也 ⑪	阪元政三郎 ⑧
心臓血管外科	岩橋英彦 ⑰	林田好生 ⑳	財津龍二 ⑰
皮膚科	徳丸良太 ㉒	吉田雄一	高橋聡 ⑱
泌尿器科	田丸俊三 ⑨	入江慎一郎 ⑰	中村信之 ⑩
産婦人科	吉里俊幸	小濱大嗣 ⑮（3東）	井上善仁
〃		辻岡寛 ⑮（3北）	
眼科	尾崎弘明	右田博敬 ⑯	近藤寛之
耳鼻咽喉科	今村明秀 ⑪	柴田憲助 ⑨	坂田俊文 ⑩
放射線科	清水健太郎 ⑰	高良真一 ⑱	木村史郎 ⑬
麻酔科	真山崇 ⑬	廣田一紀	平田和彦 ⑫
歯科口腔外科	手島将	梅本丈二	池山尚岐
病理部	久野敏		
臨床検査部	明比祐子		
輸血部	熊川みどり		
救命救急センター	益崎隆雄 ⑪	喜多村泰輔 ⑯	
総合周産期母子医療センター		雪竹浩 ③	
［筑紫病院］			
筑紫病院（総医局長）	中島力哉 ⑭		
内科第一	山之内良雄 ⑦	土屋芳弘 ⑬	八尋英二 ⑱
内科第二	豊島秀夫 ⑧	豊島秀夫 ⑧	二宮寛 ②＊
消化器科・内視鏡部	植木敏晴 ⑧＊	宗祐人 ⑫＊	高木靖寛 ⑮
小児科	喜多山昇 ⑧	深町滋 ⑱	喜多山昇 ⑧
外科	関克典 ⑱	永川祐二 ⑲	永川祐二 ⑲
整形外科	伊崎輝昌	古賀崇正 ⑬	伊崎輝昌
脳神経外科	友清誠	相川博	風川清
泌尿器科	石井龍 ⑤	平浩志 ⑮	石井龍 ⑤
眼科	武末佳子 ⑪	佐川卓司	武末佳子 ⑪
耳鼻咽喉科	宮城司道 ⑨	田中雅博 ⑱	菅原真由美
放射線科	中島力哉 ⑭		
麻酔科	堀浩一郎 ⑬		
病理部	原岡誠司		
救急部	三原宏之 ⑨		

図書紹介

子育ての、そばにいる人はだれ？（育児支援の明日のために）を読んで

浅倉整形外科医院　院長　浅　倉　敏　明（8回生）

この度9回生の吉永陽一郎先生が一冊の本を出版された。同じ久留米医師会に所属し、事あるごとに先生には懇意にして頂いている為か、この本を贈られ早速拝読した。私は整形外科医で小児科とは余り縁が無い為、初めはなんとなく目を通していたが、次第にこの本の持つ魅力に惹かれ診療もそこそこに、一気に読み終えてしまった。

この本は六章により構成されている。第一章では先生が育児支援に関わる様になった契機について、二章では育児支援の実際の現場における臨床経験を、三章では育児支援とは何かを、四章では他科との連携について、五章では育児の未来像を、そして六章では父親、母親への応援歌と題して各章いろいろな側面から先生の五感鋭い考えが述べられている。

患者の母親からの一言「あの時先生に会っていなかったら、どうしていたでしょう。」この本の中にその言葉は実に印象的に記されている。日常診療の中で時に器質的疾患に目を取られ、患者やその家族の深い苦しみ、悩みに気づかない、気づこうとしない私自身に反省の機会も与えてくれた。

先生の心優しい人柄が滲み出ている記事が満載のこの本を、同窓諸兄に是非読んで欲しいと思います。

著　者　　吉永陽一郎
発行所　　㈱メディカ出版
　　大阪府吹田市広芝町18-24
注文電話　0120-27-6591
定　価　　本体2,000円＋税

イレウスチューブ 基本と操作テクニック

福岡大学医学部外科学第二　教授　白　日　高　歩（特別会員）

本書は福岡大学医学部出身（第7回生）の上泉医師の著作になるもので、消化器疾患のなかでも重篤なイレウス（腸閉塞）に対する一般的知識・治療と、独自に開発されたイレウスチューブについてのユニークな解説書である。イレウスについて具体的な治療指針が具体的に記載されており、イレウスに遭遇する機会の多い中堅、若手医師にぜひ目を通してもらいたい本である。

著　者　　上泉　　洋
監　修　　白日　高歩
発行所　　医学書院
定　価　　4,200円

事務局連絡

◆準会員を募集しています。（本号２１ページ参照）

他学ご出身で、嘗て本学の教育職員、医員、臨床研修医、研究生、大学院生として在籍された方々の中で、福岡大学医学部同窓会（烏帽子会）の準会員としてご入会を希望される方は同窓会事務局までご連絡下さい。出身大学の垣根を越え、共に学び相携えて大学の向上に努力したいと思います。

会費は入会費を廃し、年会費も正会員の半額として入会しやすくしました。待遇も限りなく正会員に近づけたいと考えられています。

現在、学内勤務の方に対しては既に案内状を差し上げ、既にかなりの入会申込書が到着しつつあります。

先生方の近くにそのような方が居られましたらどうぞお誘い下さい。オープンで実のある同窓会を目指しましょう。

◆趣味や生活感のある原稿をお待ちしています。

本学医学部が誕生して３３年、１、２回生のすべてが５０才を超えたことになります。

初老とまではいかなくても立派な熟年者です。生活感が滲んでいます。新設医大の後輩のために人生５０年の貴重な人生経験を語って下さい。

◆おかしな電話に注意しましょう。

昨年暮れ頃までは、医局や同門会の名を使って実家に電話をかけ、お子さん（先生方）の勤務先を聞き出そうとするものが多く、医療事故をネタにオレオレ詐欺に利用するのが目的だったようです。最近は本人になりすまして名簿を手に入れようとする常套的なもののほか、本人をカタって最新の名簿の発行時期や次期発行時期を聞き出そうとしてきます。やりとりの中でニセ者であることは見破られますが、どういう使い方をするのか判断しかねています。先生方もおかしな電話に気をつけて下さい。

編集後記

この秋、太宰府に九州国立博物館がオープンしました。さっそく訪れた某先生によると、貴重な展示物はもちろん、周囲もきれいに整備されていて、楽しい一日を過ごすことができるとのこと、次の休日には、太宰府まで足を運んでみようと思っています。

さて、年に２回刊行している烏帽子会報ですが、次号は「４０号記念誌」となります。

これを機会に誌面の刷新を行い、より充実した同窓会報をお届けするつもりです。どうぞ御期待下さい。（文責：立川）

編集委員長　田　中　伸之介（５回生）
編集委員　武　末　佳　子（11回生）
〃　立　川　　裕（13回生）
〃　喜多村　泰　輔（16回生）

第22回　全国都市緑化ふくおかフェア

アイランド花どんたく

アイランドシティ（福岡市東区）11月20日まで

烏帽子会会報第39号

発行日　平成17年11月18日
発行人　高木忠博
編集人　田中伸之介

発行所　〒814-0180
福岡市城南区七隈7-45-1
福岡大学医学部同窓会
電話 092-865-6353（直通）
092-801-1011（代表）
内線 3032
FAX 092-865-9484
E-mail:eboshi@minf.med.fukuoka-u.ac.jp
印刷所　ロータリー印刷㈱
福岡市中央区長浜2-1-30
電話 092-711-7741
FAX 092-711-7901